

朝里叢書 第弐卷

小樽郡の史實（正・続）

小林 廣 編

古老の語る

小樽郡の史實

編者 小林 廣

小樽・朝里まちづくりの会 朝里遺産部会

◇ 朝里叢書第貳卷の発刊にあたって

北海道小樽市朝里地区は昭和十五年に小樽市に合併されるまで、旧朝里村として独立した行政区域であった。区域は熊確（現桜・望洋台地区、船浜町）、朝里（現朝里・新光地区）、朝里川温泉（豊倉地区）、張碓地区、銭函地区に広がっている。この郷土・朝里への深き思いにかられて、昭和初期に、記録伝承の湮滅を憂い、古老、先達に故事来歴の聞き取りを行い、膨大な資料を残した先人がおられた。楽堂、小林 廣翁、その人である。

資料を整理し出版にいたらぬまま逝去された廣氏の遺志を継ぐべく、平成十二年、小樽・朝里のまちづくりの会は、かの資料を朝里郷土遺産に指定した。同会の朝里遺産部会はこの資料を朝里叢書として逐次刊行することを企画した。

翻刻にあたって、心掛けたことは、著者の

記述の忠実な再現であった。原文は、国語表記に関する、昭和四十八年の「送り仮名」、昭和五十六年の「常用漢字」、昭和六十二年の「現代仮名遣い」に関する文部大臣への答申が出そろった時代より前の記載であるため、原文を尊重した。

「小樽郡の史實」は昭和六年から採録されたものが同名で整理されている。又昭和二十六年から採録されたものが「古老からの聞き取り記録」として郷土研究資料となっている。ここでは古老が語る「小樽郡の史實」正・續として纏めた。此の地の歴史を淡々と今に語る先人達に感謝を捧げたい。

平成十六年九月吉日

小樽・朝里まちづくりの会 朝里遺産部会を代表して

末永 通

小樽郡の史實

目次

一	慶應年間政利村借地の記録	7
二	木村スエ媼の談話	9
三	鷺田筆五郎翁の談話	10
四	阿部フミ媼の談話	12
五	白濱園太郎翁の談話	13
六	高畑宣一著「小樽港史」より	16
七	新田鶴松翁の談話	20
八	木村三郎翁の鐵道懷古談	21
九	梅森武氏の鐵道起原講演抜萃	24
十	村井儀三郎翁の談話	26
十一	橋本堯尚翁の研究より	28
十二	大平傳三郎氏談話	32
十三	大村藤作翁の談話	34

十四	錢函假役所沿革	36
十五	東久世長官巡回	37
十六	三條太政大臣の巡回	37
十七	定山溪開闢縁起	38
十八	美泉定山の戸籍謄本	40
十九	石工長兵エの事	40
二十	明治元年穂足内村役人	41
二十一	龍眼寺並金刀比羅堂由來	42
二十二	長谷大禪師の定山研究	42
二十三	白濱園太郎翁談(再)	45
二十四	天川惠三郎の話	47
二十五	村井儀三郎翁談(再)	49
二十六	五十年前の朝里を語る座談會記録	50
二十七	徳光喜三郎翁談	55
二十八	菊地サト媪談	56

續・小樽郡の史實

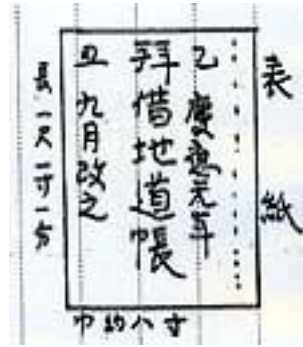
目次

一	ハイカラ饅頭の由来	吉田藤太郎	談	59
二	青山三蔵強盗に襲はれし話	水間ヤノ	談	61
三	神威古潭の全盛時代	渡辺仁多吉	談	64
四	毘紗門堂のこと	新谷久五郎	談	66
五	朝里山の上の馬糧飼草運びのこと	井原喜作	談	67
六	朝里山の上に住んでいた頃の話	水間初五郎	談	68
七	来た頃の思い出	中田仁太郎	談	69
八	神威古潭全盛時代補足	久家寿雄	談	69
九	私の経歴	木下由太	談	70
十	蛇柳の話	中田末蔵	談	71
十一	自分の来住の頃	三津吉高母	談	74
十二	土場町の思い出	本多清次郎	談	75
十三	松川勘太郎のこと	松川末松	談	77

十四	江差の繁次郎の身元調べ	中村純三著「江差の繁次郎」より	78
十五	文治沢の由来	加藤吉松	80
十六	昔話あれこれ	小倉竹松	82
十七	熊碓神社奉納の古刀	中澤慶次郎	83
十八	中△向井商店のこと	竹内房吉	84
十九	星川家及び星川座のこと	星川虎雄	85
二十	星川虎雄のこと	加賀谷惣次郎	86
二十一	杓山田の土地のこと	松永安太郎	87
二十二	色内町のこと	内海芳八	91
二十三	熊碓漁村の図と吹田家稲荷のこと	吹田富蔵	92
二十四	岡本丈助一族のこと	岡本静江	95
二十五	厩町の昔話	小林廣三郎	96

表紙題字は小林定典氏

慶應年間政利村借地の記録



川筋濱より山下迄

四拾九間

道下表口川より杭迄

一 式拾壹間四尺

(木村)

勘七

一 | |

(山口)

清左工門

一 | |

(樽見)

徳松

一 | |

(加藤)

重三郎
又右工門

吉兵工

忠右工門

藤太郎

寅次郎

平兵工

清之丞

若次郎

米松

(原田)

治五右工門

(石岡)

吉右工門

(柴田)

作右工門

清七

(神田)

才吉

勝右工門

平吉

前書通り当年九月從

御上様濱中一同間數

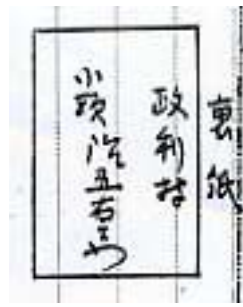
御改御棹入為下候ニ付

帳面出來印候者也

元治元年乙年 總代 又右工門

丑九月尔 〃 勘七

小頭 治五右工門



表裏紙共十三枚

右は朝里村原田清治氏（五二）の所蔵に係る
政利村（現朝里村大字榎里）の官地借入帳なり。

右の官地は榎里川より東に向ひ現④猪股場迄な
りと謂ふ。当時の戸數現時より多きを思ふべし。

小頭治五右工門は清治氏の曾祖父に当り、治
五右工門より清太郎、清作を経て現主清治氏に
及ぶ。尚前記名簿中姓の判明せるものを擧ぐれ
ば即ち左の通りとす。

勘七（木村） 平兵衛（八谷）

清左工門（原田） 註治五右工門弟 清之丞（原田）

徳松（山口） 治五右工門（原田）

重三郎（村井） 作右工門（柴田）

又右工門（加藤） 才吉（神田）

吉兵衛（石岡）

昭和六年十月九日原田清治氏に就いて調ぶ。

元治元年（1864年）

政利村 〓 まさりむら、榎里村（現小樽市榎里）

④ 〓 猪股家の家印

二、木村スエ媪の談話

昭和六年十月二十一日午後、大字朝里村字梶里澤、木村栄太郎母スエ女（嘉永二年生れ八十才）の当村移住当時の話を聞く。

「朝里さ、いつ来たてかね、さア何年になるべか、何でもわしや、十五の年（文久三年）に来て今年八十三だもの、随分経っべうんす。その前に何年となく朝里（ここ）さ通ひに來たもんだども、その時あ男衆ばかりで女子（おなご）あ來なかつたはい。家は江差だんす。仁印（原田家）は福山だはい。私の夫（つれあい）（勘四郎、約十七、八年前物故）の父親は勘七といつてその勘七爺が皆家族ば連れて移って來たんだもの、その時七十になる婆さんがゐてね、どうしても場所さなんか行きたかないって承知しなかつたんだもの、七十越したけや矢張り息子の

言ふ通りになつてついで來て朝里で死んだのだんす。木村の家は代々養子ばかりでね、私の代になつてから十六人も子供ば産んだのさ、今の栄七が七代目だうんす。私や十四で嫁に來て、十五（文久三年）で朝里さ來て、その年今の仁印の母（かっ）ちゃ（故原田清作妻今年六十九才）ば産んだもね、その時あ今のやうな貧乏でもなく、今の停車場のところが場所勘七爺が顔をしてみたもんさ。向ひの山口（徳次郎家）は私より四年ばり早く來たんだべ。今の婆ちゃんが四つの年だかに來たてもの。何てたて昔の事は今の若い人に聞かせても本当だとは思はなかんべさ。長命（ながいき）すれば面白いもんだね。今では私は玄孫（栄七の姉の孫 小樽居住）もあるうんす。この澤も私とこで一番先に拓いたんだうんす。

この澤さ來てから三十八年にもなるかね 末

子のとめ子（現札幌上野写真館主、妻）が澤さ
来て、ここではなく今國道の側に家があってそこ
で生まれたんだはい。アイヌだか？私や来た時
アイヌはゐなかったはい、アイヌはゐなかった
ども、毎年盆になれば今の竹内源次郎さんの家
のあるところ（今の朝里駅前）にアイヌの墓があ
って何處から来るもんだかアイヌが来て可笑し
なこととして拝んだのば見たはい」

右談話に依れば文久三年頃には朝里にアイヌ
は居住せざるなり。尚この事に付いては朝里村
徳光富作氏（七十六才）の談話を聞きし事あり。
氏は本村居住以來五十六年になる由なるも、当
時アイヌは一名も居らず小樽及び高嶋に居住し
居れりと言へり。然れ共現余市に居住するアイ
ヌ違星家（同族研究家として知られたる違星北
斗君は昭和四年一月死亡せり、その一族現住）

は元朝里に居住せりとの事、果たして何年前な
るか尚、探究に俟つものとす。

嘉永二年11849年

文久三年11863年

違星11いぼし

三、鷺田筆五郎翁の談話

昭和六年十一月三日松永家に於て、大字朝里
村字山ノ上住民鷺田筆五郎翁（七十六才）の談
話を聞く。

翁は福井縣丹生郡糸生村の出身、明治十七年
二十九才の時、妻と共に大和船に乗り三國港を
出帆、本道に向ふ。函館に妻の伯父ありしを頼
りてなり。然るに航海中非常の難行を續け、三
十日目に銭函濱中に漂着す。郷里出發當時十二

円の金を用意し来れるも、札幌郡篠路村に居を構へし時は懐中僅か一円二十銭よりなし。当時米一升六銭にしてその残餘の金にて米一斗と鍬一丁を求め、当時篠路に於ける筑前開墾の灌漑溝掘鑿に従事し一日一円程度の働きを為し、篠路に滿四年を暮らせり。

当時小樽郡朝里村山ノ上に中上梅太郎と称する者居住し、道廳の測量に關係ある者、篠路居住当時知合となり勧誘のまゝ、この朝里へ移住することとなるは実に明治二十一年にして四十四年の昔の事なり。

当時この朝里山ノ上に居住し居れるは、中田與作、江上宇平、井原仙之丞、新谷久助、小沢石松、三津孫三郎、牧田甚左エ門、播摩甚六、青山三蔵、播摩廣吉、横羽仁助、室谷吉兵衛、中上梅太郎、高橋直三郎外三戸、計十七戸なり。その内現在までも永住せるは中田以下播摩甚六

家まで八戸に過ぎず。本年の如き不作は居村以來の事なり。大正二年の凶作と雖も本年よりは收穫ありたり。現在鷺田家に水田五反半あり。平年普通作として総収二十五、六俵あれども本年は全部にて四俵位なり。

杉田定一が北海道廳長官時代翁の家を訪問せられたりとの話あるを糺したるに、それは大なる誤傳なり。右は当時煤田炭鑛鐵道の列車長を為し居たる杉田杉太郎と称する者は定一の從弟にして、当時朝里駅前に居りたる小屋端清三郎方へ來りし時、招きに應じて會見に行きたることを誤傳されたるなるべしと。翁は渡道以來六回歸國せりとの事なり。

福井県丹生郡糸生村 現福井県丹生郡朝日町上糸生
中上梅太郎 原文には中川とあるが中上の誤りか

鷺田翁は昭和十五年二月二十六日午前五時死亡。同日同時刻に孫の仁司（二十二才）小樽病院にて盲腸にて死亡、同時に葬儀二つ出す。二つ花の蓮華に因み不思議とす。老妻またその年の九月死亡せり。

二つ花の蓮華は昭和七年九月、朝里山ノ上、鷺田筆五郎翁方の水田に珍しい二つの花の蓮が咲いたということは当時世間に話が拡がり新聞にまで出たのであった。同年九月二十九日の東京日々新聞、「郷土朝里第二号」参照

四、阿部フミ媪の談話

昭和六年十一月十二日熊碓村阿部豊太郎母フミ媪（七十九才）の談話を聞く。

媪は嘉永六年福山に生る。阿部安蔵に嫁し、明治六年二十一歳の時、夫と共に熊碓村に移住

す。当時駄馬に乗りて來りしものにて忍路より手宮へ出づ。港町海岸にありし立岩より以北は一帶の砂濱なりき。現山ノ上町より以東は町並にて、信香、金曇町等、特に賑やかなり。

今の山ノ上町開陽亭の向側に何の樹にや二抱えもある大樹、三本並立しあり。諸人は三本木と称せり。その下に秋田屋と称する茶店あり、直徑五寸に近き餅を賣る。人これと呼んで「三本木の餅」とて頗る有名なりき。移住後間もなくその樹は伐採せられたり。

カッチナイ、アツトマリ、フレシマ、ポントマリを経て平磯岬を廻り熊碓に出づるなれど、当時現築港駅前面の高丘、秋葉山権現の碑の立つ道路を登り、熊碓長昌寺坂を降りて熊碓へ來たりしなり。平磯岬の突端へ人道の隧道を開鑿せしは移住の翌年明治七年なりと記憶す。当時オコバチ川畔に人家十三戸、手宮に三十六戸、

砂崎町に四五戸ありたり。

当時アイヌは熊碓に居住せず。小樽入舟町現南小樽駅所在地がアイヌコタンなりき。その後金曇町の奥にも數個ありき。その後コタンを住ノ江町へ移し、住ノ江町が遊廓となるに及び高嶋へ移せるなり。

(タモの樹なり。赤タモと判明す)

(三本木坂の写真小樽図書館にあり)

嘉永六年11853年

砂崎町水天宮の下、今の堺町附近

五、白濱園太郎翁の談話

昭和七年八月二十八日、錢函村白濱園太郎翁(七十五才)の談話を聞く

白濱家は明治維新前北海道福山にあり、萬延

元年、石狩仮役所詰の役人大西文左エ門は福山の人、同人の招き依り石狩町に移住し、同年八月旧府御手場所に御雇入れを命ぜられ「慶應三年乙七月中小樽兵務省出張所被抱用度手代相勤の事」となり、明治六年錢函に移住す。

大西文左エ門は錢函なる和名の命名者なりと謂ふ。全人は明治七、八年頃石狩に於て死亡せりと。

錢函は錢函川より以西をオタスツと称し、錢函川以東濱中に至る附近を旧名ウエンベツと称せりとの事なり。大西文左エ門ウエンベツを錢函と改称せるその原因詳らかならず。鯡、濱に打寄せ、箱にて區劃して我有にせしに因ると称する者、当時戸數櫛比し弦歌湧き殷賑を極めしが故なりと称する者等あり。何れなるか不明なり。

大西の次男なる者、小樽に於ける初めの執達

吏に任せられ後、何の故にか鐵砲自殺を為し、

大西の兄息子糸之丞は札幌にて死亡せり。

白濱園松錢函に住して以來、開拓使の御用に
て石狩錢函間の運輸開始し、川崎船にて海路を
通運す。明治十三年鐵道開通に用せし枕木は石
狩より右の川崎船にて運搬せしなり。

(明治六年錢函移住ハ誤、明治前錢函ニ來ル、
或イハ慶應三年七月ナランカ)

明治六年左の辞令を受く。

錢函駅通取締

白濱 園松

勤掛ヨリ錢函郵便取扱人申附候事

明治六年九月五日

開拓使小樽郡出張所

以後左の辞令あり。

白濱 園松

七等郵便取扱役申附候事

右内務卿之命ヲ以テ相達候也

明治八年一月十二日

駅通頭 前島 密 ㊟

白濱 園松

四等郵便取扱役申附候事

駅通総官 從四位 前島 密

明治十三年七月六日

右以來引續き、明治二十九年八月三十日六十
四才にて死亡するまで錢函郵便局長たり。父歿
後翁は二代目局長となれるも明治三十一年八月
十三日依願免本官となり爾後齋藤圓次郎三代目
局長となれり。

明治十四年八月明治天皇本道行幸の砌、札幌

豊平館に御假泊の際銭函村より御用に奉りしと云ふ御前水は、何らの根拠なし。当時御名代として銭函に御成り遊ばされし有栖川宮熾仁親王殿下親しく御野立所より石狩平原を望ませられしものなるが、当時の御茶用として右の用水を供せしならん乎。当時御前水附近に數戸の民家あり。特に御前水に接近して秋田屋と称する貸座敷業者あり。故に御前水となすには少しく腑に落ちざるなり。秋田屋は現在銭函に居住する菅原仁太郎の親にして小関巳之助の妻の實家なり。

当時の御野立所は現在青年倶楽部建ちある裏手にして鐵道線路の左、濱手の丘上なり。豊足神社は道路に面して建ちその裏手の丘上、即ちそれにして、銭函駅構内擴張と共に、その丘は崩されて原形無し。

当時の銭函停車場は歌棄の現濱手の保線官舎

の位置にあり、御野立所の裏は切割にして且つ木材の巻隧道なりしなり。

当時の學校は豊足神社に隣し、現駐在所の所にありき。

御野立所の材料は、柱は檜、板は杉、総て内地産、小樽山田吉兵エより之を銭函金比羅堂に寄附し現在金比羅堂の御本殿二間平方の建物は即ちその材料なり。

銭函を通ずる新川は嶋判官時代に開鑿し、運河は明治三十何年頃開通、石狩より花畔を經、鮭其他の物資を水利輸送を為す。当時の水利係員の一人は笹原文平氏なり。

萬延元年(1860)年

全は同の同字

砌(みぎり)

六、高畑宣一著「小樽港史」より

(同書は明治三十二年十一月二十八日發行なり)

△小樽郡には神威古潭の「チャラセナイ」瀑あり、之を要するに積丹郡を除き他八郡(小樽、高嶋、忍路、余市、古平、美國、古宇、岩内)に「チャラセナイ」と称する地名存するはアイヌ語、小瀑川の意義にして地勢崎嶇なれば随つて瀑布を有する勝地尠からず。

△「小樽郡朝里村に貝塚あり」と記載しあるは果たして何處なるか後日の研究に俟つ。

△「アイヌの人口、小樽郡にては文化元年二百十六人、安政元年百三人なり。当時の小樽郡はオコバチ川以東たるは論なし。明治十五年以後他に轉じて現住するものなし。(轉居先は余市な

らんか)明治二年小樽郡に六戸十三人、明治十四年に三戸五人のアイヌ住めり。(小樽なるか、朝里なるか不明)

△福山旧事記に元禄十二年六月佐渡の九兵衛、甚太郎、三左エ門外一名、松前根布田村の源三郎以上五人、西蝦夷地オタルナイ、蝦夷より江差村にて盜商し牢獄に投ぜられたりとあり。

△北海道蝦夷語地名解によればカムイコタンと呼ぶは妄称にしてカムイ、ヘロキ(カムイ神、ヘロキニ鯡)なりとあるもカムイ、エロク(カムイ神、エロクニ座す)の義、正当ならんか?。

△張碓村稻荷社、高嶋村稻荷社は共に元禄三年の建立にして後志國中最も古の神社なり。

△「貝塚は残物捨場なり、九郡内には小樽郡朝里村、高嶋郡祝津村、忍路郡塩谷村に各一ヶ所及び岩内郡堀株村に二ヶ所あり」と記載しあ

るも朝里村の所在何處なるか不明。

△ 小樽郡の沿革、小樽郡は小樽内領、又は小樽内場所と称し、松前藩臣、氏家新兵衛の采地なりけり。元禄十一年の松前郷帳にヨイチ、シクスシ、カツチナイ、オタルナイ、ハツシャブと順記しありて小樽内は銭函村の境界、小樽内川を指示せり。蓋し松前郷帳は全嶋の主要なる地名を記載しあるも小字の地名を記さず、例せば古宇、積丹、美國と列記あるが如し。而して何故に銭函以西の小樽内なる地名がこの地に命名せられしやは、北海道蝦夷語地名解の如く松前藩政の時、請負人岡田が小樽内川のアイヌを今の入舟町の原名クツタルシに移したるより其の当時石狩のアイヌ等、クツタルシに移轉せしアイヌを小樽内アイヌと呼びしより不知不識の裏にクツタルシ及び小樽内の二地名を同一ヶ所に生せしめたるに起因し、石狩住民の呼びし他

称の地名なり。天明年間の西蝦夷行程記にもクツタルシと書し、小樽内の地名は張碓以西に記載しありて小樽港附近に其の名なし。故に往時より小樽内の地名を研究せし人多きも後世のアイヌ之を知らず、是現今に至るも附會の説止まざる所以なり。

却説小樽の請負人は今の江州商人岡田八十次の祖先にして十數年前書記せし同家の履歴書に依れば凡そ二百年前請負人となるとあれば貞享、元禄年間に請負人となり其当時小樽内のアイヌをクツタルシに移したらん。爾來數代繼續し慶應元年に及へり。

而るに北海道漁業誌略によれば是より先き、慶長年間（今より凡そ三百年前）福山の八木勘右エ門、小樽に來り漁業に従事せりと云ふ。果して然らば小樽内の移民及び漁業は頗る古しと謂うべし。

岡田が創開せし漁場は享保年間オコバチ（今の高嶋小樽郡界オコバチ川附近）及びクツタルシ（今の入舟町及び港町附近）各一ヶ所、寛政中ノブカ（今の信香町附近）アツトマリ（今の若竹町附近）、熊碓、朝里、張碓各一ヶ所、通計七ヶ所なり。

天明年間に至り小樽港は今の港町に運上屋一軒、鯡小屋五軒、入舟町にアイヌ小屋七軒、有幌町に鯡小屋五軒、勝納町にアイヌ小屋九軒、堺町に鯡小屋六軒、若竹町に番屋一軒、アイヌ小屋三軒ありて鯡小屋は町並の如く櫛比せり。又色内町に鯡小屋五軒、手宮町に番屋一軒、鯡小屋三十軒、アイヌ小屋二十軒あり。則ち運上屋一軒、番屋二軒、鯡小屋五十一軒、アイヌ小屋三十九軒及び若竹町の町並にして総計百數十戸の小漁村に過ぎざるのみならず高嶋及熊碓、錢函間は却て小樽港より戸數多かりしに、現今

の如き變動を來せるは蓋し意想外なり。

崎嶇ニきく、山道のけわしいさま。また、道がけわしくて行きなやむさま。

尠ニすくなし

堀株村ニ現、泊村ほりかニぶ

例せばニれいせば、たとえばの意

所以ニゆえん

却説ニさて

櫛比ニしニつニび、櫛の齒の様にならニぶこと

△ 天明年間小樽郡の概況表（西蝦夷行程記抜萃）

アイヌ語地名	アイヌ語地名義解	現時ノ町村名	運上屋	番屋	鯡小屋	アイヌ小屋	要領
オコバチ	?	小樽高嶋郡ノ郡界			六軒		圖合船着
クツタルシ	オーバイドタリ	港町	一軒		五軒		同
同	同	入舟町				七軒	
アリホロ	?	有幌町			五軒		圖合船六隻位着
カッチナイ	?	勝納町				九軒	
アツトマリ	鯡群來泊ノ義	若竹町		一軒	家立並ブ	三軒	
フレシユマ	赤岩の義	同		全			町並通りトアリ
クマウシ	魚乾柵多き義	熊碓村		一軒		六軒	
アツウシユナイ	?	朝里村			家立並ブ		朝里川ニ橋アリ
マサリ	?	同			同		
カムイエロツク	神座ス義	全村カムイコタン			所々ニアリ		大岩ノ内ヲ通行
ハルウシ	食糧多キノ義	張碓村		一軒	立並ブ		ストアリ
レプウング	北部のアイヌ松前氏	同			同		
ルトマリ	ニ來謁ノ時泊舟セシ所ト云ヒ又山舟人來泊セシ所トモ云フ						

*オーバイドタリ||「小樽港史」原文、小林氏資料にもオーバイドタリとあるがオオバイタドリノ誤植と思われる

七、新田鶴松翁の談話

昭和八年五月十三日張碓村山ノ上新田鶴松翁
(八十五才)の談話を聞く。

翁は嘉永二年南部に生まれ、二十五才明治六年張碓村に來住。最初高嶋にありしも二十五才の時移住す。当時自分は樵夫にて毎年秋より春二月頃まで張碓村山奥に入り角材を搬出し、それを目下日の出の勢にて發展しつつある小樽へ海路船にて積出したり。夷嶋附近に毎日二、三十隻の三半船、保津船のか、らざる日なき盛況振りなり。

当時山ノ上には民家六、七戸よりなきも樵夫の入込み盛んなりし為め飲食店(白首屋)二軒、風呂屋一軒、鍛冶屋一軒あり。鳴海慶治、山本菊太郎両家の先代は即ちその飲食店にして、あまりに風紀を紊せしにより警察の手にて解散せ

られたり。森山留太郎家の先代は即ち鍛冶屋なりき。現安村兵四郎家のある家敷は松前藩か、或いは開拓使なるか、この附近を統轄する役人の駐在せる屋敷跡にして、周囲に堀をめぐらし住民之を「お屋敷」と称し(今でも斯く呼び居り)その役人を「お殿様」と呼び通行の際は冠り物をとり腰をかゝめて敬す。その役人の名は葛山勇助と云ひ、鬚を結び帯刀す。小林萬太郎と云ふ住民その葛山の仲間となり一本腰に差し主人に仕へ百姓の出世とた、へたり。その葛山は餘程勢力のありし者と見え、当時星置に中嶋と名乗る役人駐在し、あまり心掛良からざる者として百姓之を恐れたり。故にある時何人の悪戯にや、道路の見易き所に標札を立て書して曰く「星置の中嶋さ白蛇出る 葛なければ百姓立たない」即ち葛山の為め頭を抑えられ居るを意味するものなり。而して蛇は葛の樹を恐れ嫌ふ

意味とす。その後葛山は東京に移りたりとの事なるも、翁來住後二、三年はこの張碓に來たりしを見受けたり。翁の來住当時はその役宅は取毀してあらざりき。

アイヌの家は当時なし。小樽入舟町にはアイヌ住み熊鹿類の頭蓋骨を杭に刺し家の前にズラリと列べありしを見たり。熊鹿の住み居りしは言を俟たず。人、鹿を海に追ひ込みこれを捕へし事もあり。熊は現鳥瀨家のある澤を下り雑倉にある數の子を食ひ逃げたる事もあり。当時鳥瀨家はチャラツナイに住めり。

三半船〓さんばんせん、中国語、中国を始め東南アジア沿岸や河川で用いられる小舟、はしけ

保津船〓保津知船（ホツチ）、江戸時代北海道西岸地方で使われた水押（みおし、船首材）付き漁船の一種、二十石前後のものが多い

寮せし〓みだせし

白首屋〓酌婦、娼婦を置く店

葛山〓かつらやま、安政五年、幕吏葛山幸三郎、箱館奉行所より張碓山ノ上に移住

仲間〓ちゅうげん、武家の奉公人、雑役に従事

八、木村三郎翁鐵道懷古談

昭和八年十一月十八日（北海道鐵道記念日、手宮輕川間鐵道開通は明治十三年十一月十八日なり）朝里村木村三郎翁（六十六才）の鐵道懷古談を聞く。

翁は明治元年五月二十四日木村勘四郎三男として朝里村に生る。十三才より十六才まで小樽勝納町の荒物雜貨問屋青木吉太郎家（乙松先代）に奉公し十三才より十五才まで年手当四十円、十五才より十六才まで月額五円を給され、始終

札幌の取引先に出張す。当時大番頭、秋田縣由利郡平沢の人、須藤淺吉（現主須藤健次先代）につきて四書等習得す。当時の月額五円は莫大なる金子にて血氣未だ定まらず。遂に遊里に親しむやうになり、主家に迷惑をかけ、遂に朝里に戻る。爾來実家の漁業に従事す。然るに明治十七年の頃か、当時の朝里停車場係員を村内より採用の議あり。村内の有力者、翁若年なるも文筆の心得あるを以てこれを推舉せるに同村内に高橋三郎なる者あり。即ち競争の立場となり、高橋三郎、翁より二年年上なれば遂に停車場詰員となる。高橋三郎の前には小黒廣弥と云ふ当時鐵道役員の息子と称し勤め居たり。後小黒は巡查を志願採用となり、而して高橋三郎その後を承けたるなり。然るに高橋三郎附近に樽見善作家あり。その家の娘菊代と懇ろになり職務を怠りたれば其筋より幾何もなく免職となる。菊

代は現在小樽に住む樽見重兵エの姉なり。若くして死す。茲に於て再び翁をして係員たるの交渉あり、即ちその職に就く。是実に明治十八年秋（何月か忘却す）の事なり。

当時の鐵道は北海道開拓使の管理となり、本部は手宮にありしと記憶す。毎日の収入金を汽車の車掌に引継ぎ、手宮の役所へ納め役所より太政官鐵道運輸係某の領收證を回送せらる。當時の運輸課長とも云ふべき人は小田敬忠と云ふ人なりき。

朝里停車場は当時現朝里駅構内東端、渡辺惣太郎所有濱、元の余佐藤久助家の前、即ち道路に沿ひ線路の濱手にあり、僅か四尺平方の小屋に過ぎず、丁度現在のポイント小屋の如き建物にして係員は唯翁一人なり。停車場の事をフラッグ、ステーションと称す。勿論、電話、信号機、待合所、歩廊、貨物線、貨物置場等なし。

汽車の往復は午前一回、午後一回、一列車の牽引力は客車二台、貨車三、四台なり。給料は一月六円を給さる。紅白の旗を持つ。青旗は持たず。乗客賃金は次駅住吉（現南小樽）まで十錢なりき。後炭鑛時代となりて四錢に低下せるる事あり。

機関車は一号義経、二号弁慶、三号比羅夫、四号光圀、五号信廣、六号しづかの六台あり。当時の車掌に（列車長と称す）石崎、山脇、今、寺田と称するもの乗務せり。

翁の朝里駅長時代は明治十八年より約一年半に亘りて辞す。辞職の理由は血氣時代にして高橋同様遊蕩の結果なるも、免職には非ざりき。尚後任者は上田某と称する者なりき。

当時の機関手は西洋人乗務す。翁当時の衣服は私服にして詰襟洋服なりき。

保線工夫に北川勘次郎と称する者、朝里駐在

して五、六名の工夫居り、出働せざる日は歩引き、特に激しき出働ある日は歩増しありと見え、冬期間降雪量多き日にはスノーブル祝いなぞ行ひ歩増祝いを為せり。除雪方法としては現今のラッセル式に似たる軍艦の舳の如きスノーブル車あり。高さ七、八尺操縦者中に居り、木製なり、それを機関車押し進むなり。

翁は昭和二十五年五月十九日札幌市南三条西六丁目ポラリス木村伊三郎方にて八十五才にて死亡す。

（高橋三郎、慶應二年生、明治三十八年五月二十七日朝里ニテ死亡、養子武光、錢函村に現住す）

幾何もなくいいくだもなく、いくばく（幾許）もなく

歩引き、歩増しぶびき、ぶまし 割り引き割り増しの事

スノーブル snow plough、除雪車

九、梅森武氏の鐵道起原講演抜萃

昭和八年十一月十八日鐵道記念日、小樽郷土
研究會主催、第三回研究發表、於小樽圖書館、
手宮駅長梅森武氏の講演を聴く。

右講演中より抜萃

我邦鐵道最初は京濱間明治五年十月十四日明
治天皇の行幸を仰ぎて開通式を舉行せりと云ふ
もそれより三年前実に明治二年八月古宇郡茅沼
炭鑛に巾員二呎六吋延長二哩、軌條三十五ポ
ンドの鐵道が敷かれたのが日本最古の鐵道である。
手宮札幌間の鐵道は明治十三年一月八日若竹町
第四隧道より工事に着手、この第四隧道とは熊
確隧道なり。当時の名称を幌内鐵道と云ふ。同
年十一月十八日手宮輕川間開通、全月二十八日

輕川札幌間開通、十六年九月十七日幌内まで全
通し、同日札幌にて開通祝賀會を開催、小松宮
彰仁親王御台臨、大山陸軍卿御隨行す。

當時手宮札幌間に隧道五あり

呎IIヤード、吋IIインチ、哩IIマイル

ポンドIIレールの重さ、「軌條は、手宮・江別間約四十マ
イル（六十四、四キロメートル）には一ヤード（九一四ミ
リメートル）に付き三十ポンド（十三、六キログラム）」
の記述あり。国鉄北海道総局編「北海道鐵道百年史上」
一九七六年

第一隧道 小樽水天宮下 五五六尺 現在花園橋附近なり
 第二隧道 小樽住吉 三五二尺 現在南小樽駅構内なり
 第三隧道 小樽若竹 一〇二尺 現在の熊碓隧道西口より約一町附近明治二十五年頃までありき
 第四隧道 熊碓 二四八尺
 第五隧道 張碓 不明（但最短ナリ）エビス嶋張碓川ノ西ニアリ
 第六隧道 銭函 銭函驛構内 神社前ナリ

註 「昭和十二年版北海道誌 和本」

張碓隧道ノ長サ四十七尺ト判明ス

尚手宮幌内間ニ隧道六アリ、第五マデハ下記ノ通り 第六ハ幌内ニアリ 長サ百二十尺トス

当時銭函駅構内ニアリシハ隧道ニ非ズ枕木材巻トンネルトス

開業当時手宮札幌間の運行は夏は一日二往復、

しづかの二輛出来せり。

冬は一往復、午前九時手宮發 全十一時札幌着
 機関車、明治十三年に義經、弁慶の二輛出来、
 同十四年に比羅夫、光國の二輛、十七年に信廣、

当時の貨金は、手宮札幌間 上等八十錢、並
 等六十錢、新橋横濱間使用の客車は英國より購
 入の四輪車なるも、手宮札幌間の客車は米國よ

り購入のボギー車なりき。

明治二十二年十二月十日、炭鉱鐵道會社私下を為したる時道廳は左の三條件を附したり。

一、朝里錢函間は線路通行を承諾す

(小林惟ふに朝里、錢函間の線路敷設は道路上に敷設せるが為めならん)

二、十ヶ年農産物輸送は半額貨とす。

三、移住民は無貨とす。

明治三十九年十月一日に國有鐵道となる。

機関車義經號は現在東北本線黒磯機關庫に保存しあり。明治大帝御召車の開拓使號は現在東京大井工場に保存す。その東京回送は恰も関東震災當時にて震災四日後に東京へ到着し危きを免れたり。

十、村井儀三郎翁 談話

昭和八年十二月六日熊確村山ノ上村井儀三郎翁を訪ね懷古談を聞く。

翁八十四才(嘉永三年生)妻七十八才共に頗る元氣、翁、今尚白米一俵十六貫を負ひ、急坂を登る、夫婦して餅を搗く事さへあり。

翁は嘉永三年福山に生れ、安政四年八才の時來住す。恰も神威岬以北婦女通過解禁の翌年なり。当時張確村にアイヌ居住せず。文久二年十三才の時朝里村に手習師匠あり、勉學に通ふ。

その師匠は福山松前藩の足輕にて姓名記憶せず。「又奥山家の隣に出張(でばり)番屋あり。その番屋を借りて教授せり。二年ばかりにしてその足輕石狩へ轉居す。

文久三年九月、長昌寺丘上に秋葉山大權現の碑を建立せるは佐渡の人松本甚助にして勝納の住と云ふも誤りにて信香の住人、繩、筵、疊、座類其他荒物雜貨を商ひたり。大いなる倉庫に

下家を降して商賣し居りしと記憶す。夫婦のみにして子供なきしが如く、二、三度も火災を免れし故の謝恩の爲めこの碑を建てしと云ふ事なり。秋葉山權現は火の神様ならんかと。

(遠州秋葉山が本元にて火災の神なり)

繩、筵、疊、塵_レなわ、むしろ、たたみ、ござ

下家_レしたや、母屋に付屬する小さな家、納屋など。下屋

翁、來住当時神威岬通過の際、帆を半以上に降ろし、切火を打ち、神酒を捧げ禮拜して通過せり。父は伊勢屋石松と云ひ、後惣六と改む。平民に苗字を赦されしは明治以前なり。年代は判然と記憶せざるも兎に角明治元年には村井姓を名乗り居りたり。その苗字は別段お上より貰ひしものにあらず。最初は唯自分分思ふまゝ、の苗字を附し届出でたるなり。隣家に床屋あり。

山より川の流るものなれば山川と附けべしとて右の如く届出たり。

(明治以前に姓を名乗りしとは翁の記憶違ひにてあらんか)

翁のチョン鬚を落せしは三十才頃即ち明治十一年、二年の頃にして熊碓村住民殆ど散髪せり。

明治元年小樽内騒動の時は十九才にして未だはつきりと記憶するは夜の八時頃、朝里方面よりどきの声を上げつ、百人ばかりの人数押し寄せ來り、戸毎に戸を叩きつ、百姓漢師一揆してお上にお願いの筋あり歎願に行くべし、若し同行せざれば家々を焼き拂ふ由なりと叫ぶ。何事か知らねど焼かれては大変。それでは行つてくべしと出掛けんとせるに父これを制し、汝は若輩、間違ひあらば、取返しつかざるにより我行かんとして、父、これに参加す。而して約一時間の後またまた前の人數より多きほどの大勢寄

せ來たり、前同様各戸を誘う故、我家にて既に前に出掛けたりと答へたり。この農漁隊の同勢は勝納川の東に陣し、所謂發頭人の博徒等のみ信香の勤番所を襲ひたるたり。

何らの理由も知らず参加したる農漁民の内にも血氣にして短氣の者は博徒等と共に役人に手向ひ一命を失ひし者ありと聞く。朝里の仁印原田家に居りたる若者、即ちその為め鐵砲にて打たれ死にたりとの事なり。

(余(小林)、問ふて曰く、当時熊碓村の儀兵エ、小太郎の二名役人側に味方し平定後褒賞に預かりたりとの事なるが、その儀兵エ、小太郎とは何者なるかと)

儀兵エとは当時熊碓の濱役たりし平印堀内儀兵エの事なり。鯨建網業者なり。その息子吉松背低く太閤と呼ばれしも父の跡を継ぎ濱役を為し若くして死亡す。現在遺族何處に居るか判明

せず。多分長昌寺につきて探ぬれば、墓ある關係上判明せん。又小太郎とは加藤小太郎の事にて家は鯨刺網漁を為すも百姓総代を為しゐたり。家印を千と称す。堀内家は現阿部豊太郎家の所にして加藤家は現學校下にありたり。加藤家の遺族は小太郎の孫に當る加藤桃太郎、現在熊碓寺の沢に住す。

現在熊碓神社に掲げある額「熊碓村鯨場の圖」は明治八年の作にして筆者は面接せし事なきも現吹田富藏家に寄寓し居たる画家の筆になるものなり。

(画家の名を中村宗誠と云ふ)

十一、橋本堯尚翁の研究より

橋本堯尚老は小樽史談會を主宰し本道研究家の權威なり。その研究の内より小樽郡に關係す

る分を聴取し左に掲ぐ。

○明治以前熊確にアイヌ住めり。現在上川郡近文に住む天川惠三郎はアイヌにして熊捕の名人、昭和八年七十才。その先代は熊確にありてオタルナイ一帯の酋長なりしと。後一家濱益に移り住む。明治初年、惠三郎、濱益より小樽に來り量徳學校に學べりと云ふ。

(近文ニ非ス濱益現住ナリ)

○小樽市緑町一丁目十一番地に住む渡辺友吉氏(昭和八年六十九才)の先代は友蔵とて松山佐吉、森山鍛冶屋等と共に安政五年、函館より葛山幸三郎に伴はれ張確村に土着せるもの、即ち友吉氏は張確にて生まれしものなりと。友吉氏永らく小樽市役所に勤務し、現在退職し居る。

○明治元年十一月六日石狩役所司事井上弥吉(後熊野九郎と改む)は箱館戦争榎本配下の脱走組百五十名小樽に來れるにより身辺危きを覺り張

確村に逸れ、漁業西谷嘉吉方に身を隠し、嘉吉大いに義俠あり井上をして二里奥の山中に小屋を作りて隠棲せしめ一冬を食料運搬養護せり。翌二年三月この乱平定後井上は小樽より船にて青森に向ひたり。

井上現在山口縣山口市鰯石町に住む。大正七年夏開道博の時來道し石狩に赴き且つ錢函に來り恩人西谷の遺族を尋ねしと云ふ。後大正九年五月七十八才の身を以て再び來道石狩に來れりと。

「廣調」西谷嘉吉は金印にて現在張確村竹田芳太郎番屋の個所に漁場並家屋あり(張確村三十番地)更に明治十年頃小樽山ノ上町にて酒屋を営めりと、嘉吉の死亡年月不明、長男幸吉天保十三年生、大正七年隱居とあり、幸吉長男仁吉明治三年生、大正十一年二月六日函館にて死亡とあり、仁吉長男源蔵、仁吉妻チヨ東京に寄

留昭和四年、仁吉弟與吉は大正八年早來に轉籍とあり。(朝里村役場戸籍簿より)

○定山溪開發者美泉定山は安政三年備前美作より渡道、久遠郡太田村太田山眞言寺の別当となり安政五年春張碓村野村治兵エ方に來たり附近を布教しレブツツカより定山溪に至り温泉を發見、萬靈塔を建立す。

「廣調」野村治兵エ、張碓村二十番地に住み、文政五年生、明治二十九年死亡、現張碓村野村清次郎は別家なり。孫幸太郎、明治十一年生、大正四年オタモイにて轢死、幸太郎長男幸次、小沢村にて昭和五年死亡、幸次の遺族小沢村に現住す。幸次弟保幸、小樽砂留町五六に母キクと共に居住(朝里村役場戸籍)

○河原勝興の前歴、明治八年樺太と千嶋との交換問題生じ黒田清隆、榎本武揚等露西亞に至り断判の結果、樺太を露に渡すこととなり、

樺太在住の邦人三百三十二名を函館と小樽とに半數宛歸還せしめたるが、内小樽奥沢村に歸着したる者の内河原勝興、東善八、友成某等あり。後河原は朝里村戸長となる。

(河原政秋七十七才、昭和二十四年住所 札幌市南三条西九丁目中通り南向 大正五年朝里を引揚げ東京へ、昭和三年札幌に來住)

○朝里村に関する詩歌

小樽湾中八景の内

朝里落雁

管谷則男

秋されば あさりの浦の 月影を

つばさにかけて 落つるかりがね

明治九年小樽にて

湾中八景を詠みたるを聞きて

三條實美

君が代は蝦夷か千嶋も敷嶋の

みち開けりと聞くぞ嬉しき

小樽到札幌途上所見

長 三州

壓頭峭壁勢掀舞

鐵路東奔循海浦

行人不肯仰頭望

碎石自天飛若雨

右は明治の作、三州は詩人にして、明治大帝の書道の師なり

松浦武四郎

錢函にて

蝦夷の山 おもひ深めてわけ入りし

いはらの奥も 道ひらけけり

神威古潭

神居きし なみのしらいふ 手向けり

こや海さちのしるしなるらむ

右二首安政四年秋の作

○札幌神社神霊の経路

明治二年九月一日東久世長官本道に赴任するや自ら三神を奉護して函館に來り。嶋判官函館より之を守護し奉り寿都、磯谷を経て錢函に來り。先づ錢函の假治所（白濱園松家）に安置し奉り、十二月三日札幌假廳の落成と共に其の廳内の假殿に安置せり。

○安政七年、小樽内澳場請負人岡田半兵衛の支配人田沢長兵衛の指揮を受け村事務を執りたるは番屋守、熊碓 與左工門、朝里 五十嵐清蔵、張碓 元次郎とす。

○ 錢函通行屋、後本陣と云ふ。

○ 稻荷神社の由來

稻荷大明神は印度より支那に渡り應神天皇の御代に京都伏見に渡り開かれしを日本の創基とす。実神は保食神（ウケモチノカミ）と云ひ支那にては稻倉神と云ふ。日本にても豊受其他種々の別名あり。錢函の豊足もその一種なり。徳川時代、民家にては稻荷及弁天より外の神を祀ること禁じられたば、各地に稻荷社の散在するなり。正一位の位は伏見稻荷のみ叙せられしものにて、末社これを使用するは、伏見の許可なき限り、無断使用し居るなり。

錢函の豊足＝豊足（とよたり）神社、小樽市錢函二丁目九番地十号

十二、大平傳三郎氏の談話

昭和九年一月七日新谷家にて朝里山ノ上住人大平傳三郎の談話を聞く。左の談話は大平氏古老より聞きしものなりと。

○ 朝里山ノ上の起原。

明治十五、六年頃初めて能登の人青山三藏來住、現在林健次郎家のある所に居を卜す。青山と相等しき頃播摩五右エ門（能登大嶋より來住せるを以て俗称大嶋の寅さんと呼ぶ）濱田某移住す。この播摩五右エ門、後利尻に渡り現在稚内に住す。次いで明治十七年、江上宇平、十八年新谷久助來住せり。大平家は明治二十九年の來住なり

○ 山ノ上、土地の争ひ

山ノ上平坦地に鹿多く住み、現在、朝里本線とする六間道路は鹿の歩みし徑を元として道路

とせしなり。青山、播摩來住の頃小樽住吉神社の神官に米川某と云ふ者あり。青山、播摩、濱田の三名に山ノ上一帯を出願させ許可を受けた。漁師これを聞き大いに驚き、斯くては漁業に必要な乾場並食用野菜地を失ふことなれば総代亀谷藤次郎（勇吉先代）漁師一統に勧め右の内三間道路以北（現國道以北）を漁師側に請ふて許可を受け、亀谷自身畑一番地を所有す。青山家は右三間道路より以北内にあるを以てこの分だけは青山の所有に帰せり。然るに農家三人に対し三間道路以南全部の土地を許すとしたりもこの代金支拂に窮し、遂に米川に相談、他人に分譲することとなり、米川は山田吉兵エをして分譲を受けしめたるは即ち~~本~~地なり。また、最上事相馬某の手を経て札幌縣令調所廣文の所有となりしは現大井代次郎所有地なり。また、榎幾太郎も相当の土地を所有せしなり。

○ 果樹の元祖

明治八年より十一年迄の間に於いて開拓使は小樽郡、高嶋郡に林檎其他の果樹苗數千本の無料給與あり。自作農には桜十本、葡萄十本、林檎十本宛、土地を所有すれども他人に小作さす者には前記の半數を無料配付せり。その内現存するは大平家前にある桜桃一本（若ベッコウ）にして植樹したるは榎幾太郎氏なり。葡萄三十種の内今日に至り尚各地に散在するは黒チャンピオン、及小茶の二種なりと。

○ 山田吉兵エの弟、

明治二十九年大平家來住前より山ノ上石橋喜兵エの借家において日雇漁夫なぞせる男に對嶋富太郎は山田吉兵エ、岡田傳五郎の實弟なり。道楽者と見え獨り朝里に住し明治三十年前後他に移る。その住める石橋の借家は明治三十三年小林與三太郎一家が一時住み、間もなく倒壊せ

る家なり。

十三、大村藤作翁の談話

昭和九年一月二十七日張碓村大村藤作翁（八十一才）の談話を聞く。

藤作翁は安政元年南部に生まれ三才の時福嶋縣に養子に行き十九才の時渡道。時に實両親、錢函にありて相当資産を有し、春、張碓に來りて鯨漁業を営む。本籍は当時江差にありき。

○錢函札幌間道路開鑿

翁十九才、明治五年錢函に來るや、その年錢函札幌間の道路開鑿の事あり。翁若年なれども錢函星置間の請負を開拓使より命ぜられ、五間幅の道路を開鑿す。当時人夫は地方人賃金高價なりとて使用せず、開拓使より配当、総て薩摩人の人夫なりき。

○小樽錢函間の道路も明治五年着工し、翌六年、一年かゝりたり。或は翌七年までかゝりし様にも記憶す。張碓夷嶋附近張碓川側の隧道（汽車隧道の濱手下方にあり）はその年明治六年に開鑿せられしものなり。

○張碓川切替工事

張碓川の線路より約四、五十間奥の崖を切割し川を直流にしたるは草野倉之助と称する当時その川尻に鯨建網漁業を為す者、自己の漁夫を使役し明治十四、五年頃二春かゝりて竣成せり。草野は張碓山ノ上鳴海慶治の叔父に當る。尚、その切割より川奥一ヶ所をも切替えせん予定なりしも如何なる都合なるか中止せり。

○美泉定山の事跡

定山が張碓村野村治兵エ方に在りしは事實なりと思ふ。総てこれは人聞きによるも、当時野村治兵エは現張碓駅の所にあり隣家に西川 吉

(現存、藤吉先代)あり。定山は太田の別当、若は太田の法印と称されたり。即ち山伏修験者の称なり。また神威古潭齊藤熊五郎渙場(齊藤長松先代なり、長松相續人は熊蔵)(現在青木渙場と称する齊藤平吉所有渙場)にも滞在しその船入を片づけなぞして働きし事あり。大力にして人力數名を要する大岩も法力を以て片付けんとて美事動かせしと云ふ事なり。張碓山ノ上左方に湯ノ沢と云ふ所あり。定山、冷泉を發見し浴場を拵え、村民に入浴大いにその徳を慕はれりとの事。それかあらぬか張碓山ノ上地藏堂(墓地)前に定山の記念碑建てあり。更に現在張碓山ノ上三社明神横にある不動明王は元神威古潭突端に安置され、後道路開鑿の時張碓駅附近の凹地に移し、線路複線工事の時現在の箇所に移されしものなるが、この不動明王は神威古潭に居りし石工の手にて刻みられしものと聞く。

而して定山は太田山眞言寺の不動様を布教せしとの事故、或は定山の布教に開基するものならんかとも思はる。況んや野村治兵工はその神威古潭突端の近くに居住せるに於いてや、尚右不動の管理は浪花兼吉、北濱豊蔵、鳥瀬常吉三名の者管理せりとの事なるも右は野村が居を他に移せし後の事なるべし。浪花は現在の所と変わりなけれど、北濱、鳥瀬は現在保線管舎のある所に住み居れり。

「廣調べ」野村八檜山郡北村ヨリ、野村八五番地、西川八六番地、(城下ノ家)鳥瀬寅吉十番地、北濱嘉兵工十二番地、浪花宇三郎十六番地

記念碑トハ萬靈塔ノコトナリ

船入 〓漁船などが入る、小さな入り江

城下ノ家 〓葛山屋敷下か

十三、錢函假役所沿革

明治二年十一月十二日嶋判官は錢函に着した。

岩村判官は函館にあって東久世長官を補佐し、嶋判官は錢函にあって十二郡を管轄した（嶋牧、寿都、歌棄、岩内、積丹、美國、古平、余市、忍路、札幌、厚田、浜益）この十二郡は西蝦夷地の大部分を包有し漁業隆盛、従って収税上樞要地であるのみならず、内札幌郡は本道首府建設予定地札幌を含んで居るのである。換言すれば根室、宗谷は国防上の門番、樺太は獨立せる前哨で、この錢函假役所の管轄地こそ新開拓の中心地であったのである。加ふるに嶋判官は上席であった、事実上次官たるの姿であったもので、その計劃並その実施は充分の實力を伴ふてゐたのである。錢函役所は別に新築を為さず白濱某（園松家）の居宅を以てした。錢函役所施

政中の主なる事は第一、規模なる札幌府の建設であるが、この事は別項に述ぶる。第二には手宮、寿都海関所の設置である。この事は福山、江差の商民其他に多大の影響を與ふるものであるが蝦夷地物産の分配並開拓使収益上より見れば至便なることは云ふまでもない。次に海関所の開設に伴ひ、同所に問屋を新置した。明治二年頃には小樽内附近既に立派な村並と成つて居る。明治元年辰年の「穂足内村役人名前」には延嘉（現信香）名主兵藏、同年寄三藏、同百姓代五三郎、同百姓代喜六、アツトマリ頭取傳次郎、同小頭兵助、同百姓代市右エ門、セニハコ頭取利右エ門、同小頭藤藏、同百姓代長右エ門の名が乗つて居る。住民は穂足内村々に属するオコバチ、延嘉、アツトマリ、クマウス、アサリ、ハルウス、ゼニバコを合して永住家數三二四軒、人數千四百十二人、内男七三二人、女六

八〇人、出稼家數二二六軒（註この出稼家とは
事實は入稼家のことならん）此人數八百九十六
人、内男五五三人、女三四三人 この合計五五
〇軒、二、三〇八人

その内最も繁盛の所は延嘉で永住出稼合して
二三六軒、七七九人、内男三七七人、女四〇二
人で、錢函は明治元年に永住家五〇軒、人口二
二九人、内男百三十二人、女九十六人、出稼家
四十五軒、人口百二十八人、内男八十九人、女
三十九人であった。明治三年二月、嶋判官の管
地は長官の直轄となった。六月に開拓使札幌へ
移廳した。明治三年十一月全嶋の澳場請負人を
札幌へ呼出し請負人廢止を命令した。

（以上、大蔵省出版、「開拓使事業報告書」よ
り）

規模||眼目、かなめ、きも

十四、東久世長官巡廻

明治三年六月十一日、東久世長官、東西場所
巡見の爲め、判官得能恭之助を随從し、萬小路
通房を同伴（中畧）六月十九日茅沼石炭山検査、
鐵路四噸積車を運轉するを見、（中畧）二十二日
には忍路を經、小樽着。（中畧）二十八日錢函を
經、石狩に赴く。（右東久世長官目錄抄より）
（或いは四年？）

畧||略の俗字

十五、三條太政大臣の巡廻

明治九年八月、三條太政大臣は參議寺嶋宗則、
山縣有朋、伊藤博文、元老院幹事睦與宗光、權
大史巖谷修（一六居士）、土木權正石井省一郎等

一行四十名、八月二十一日、函館より小樽に着し、同日札幌に入る。二十九日札幌發、勇拂、室蘭を経て帰京、この時、時の長官黒田清隆、全道區戸長總代に告諭を發し、今般大臣の巡回は天皇の特旨に出でたるを述べ、想ふに天皇の臨幸遠からず、人民一般其業を勵み獨立不羈の民となり國家富強を賛成するを期すべしとの旨を以てした。

(右開拓使事業報告より)

(熊碓村、渡辺治三郎氏ノ談、當時三條公は駕籠ニテ通過セリト)

獨立不羈¹¹なものにも束縛されない

十六、定山溪開闢縁起

札幌中央寺住職尾崎文英

定山溪は元定山法印の開發する所にして、今其縁由を尋ぬるに、定山は越前の人、安政三年渡道して渡嶋國久遠郡太田村眞言寺の別当となる。人喚んで太田の法印と称せり。同五年春小樽郡張碓村に來化し同村の名家野村治兵工氏の帰依を以て附近の渙村に布教し、傍ら渙業の開發を幫助し、尚從來移民の中途にして斃れたる無縁の精靈を慰め萬靈塔を造立せる等草莽の時代に於ける宗教家として貢獻せる事蹟は尤も推稱すべきものなり。此時に於て所化の因み或る旅舎に投ぜしに一土人の婢、鐵瓶の湯を濺いで洗足の鹽を供しながら其急遽の間不自由を感じつし、吾が郷土には天然の温泉湧出する旨獨語せるを聞き翌日其土婢を嚮導に伴ひ荆棘を踏み巖を攀ちて溪谷の間に於て靈泉を發見し欣舞措かず、是に於て自らこれを開發して鼠人の湯治に便せんと欲し村民と圖り、張碓村礼文塚と

称する山中より本地に達する道路を開鑿し、爰に浴場を営み近村部落及び小樽市人を誘導して馬背に依り食糧其他の物資を運搬せしが融雪期に至りて數ヶ所の溪流膨脹して往來途絶の難屢々なるを遺憾とし、文久三年札幌より豊平川に副ひ安全なる道路を得、更に明治二年これが助成を官に請ひ超えて同四年七月、開拓使長官より定山を以て湯守に命じ、道路を通じ浴室を設け、これを管理せしむ。これより定山溪温泉と称するに至れり。(中畧)而して定山が初めて温泉開發に付て艱難經營の経路は實に筆舌に蓋し難く(中畧)当時吾中央寺初住小松萬宗和尚深く定山の熱誠を感賞し常に寺内の金毘羅堂に奉伺せしめ金毘羅大權現の威徳を借りて靈泉の宣傳に勉めたりし事は今尚堂内に保管せる獅子頭こそ彼が札幌行化の際使用せる当時の記念遺物なり(下畧)

(越前ニ非ズ備前ナリ、萬靈塔ハ張碓山ノ上ニアルソレナラン「然り」)

右昭和三年十二月二十五日豊平峽保勝會發行大山黙笑編「豊平峽探勝雅遊録」より

來化||來下(くだり來ること)か

草莽||民間、在野

濺いで||そそいで

洗足||草鞋、草履の時代は、家に入る前に足をすすいだ

鹽||たらい

鼠人||、庶人(そじん)か?

屢々||るる、しばしば

奉伺||おうかがい申し上げること

行化||修行と教化。また、教化を行うこと

十七 美泉定山の戸籍謄本

養子 秀三

明治四年二月十二日生

札幌郡平岸村六十六番地

明治三十二年九月十八日家督相續届出同日受附

平民戸主 美泉 定山

(右豊平町役場戸籍簿より)

文化十二年正月七日生

明治四年四月九日岡山縣備前國赤阪郡周匝村ヨ

周匝村IIすさいむら

リ轉籍

明治十一年十二月山中に入り行衛不知

十八 石工長兵エの事

明治二十七年十二月満八十才ニ付除籍

年月日不詳宮城縣氣仙郡末崎村

石工長兵エなる者、慶應二年手宮の洞窟を發

妻 キン

天保二年正月十五日生

平民姓不詳佐五右エ門長女入籍

年月日不詳札幌郡平岸村平民亡柴田峻九郎

亡三男入籍

見せりと云ふ出所は元道史編纂主任河野常吉翁
が小樽市中央通り郵便局長村上氏の嚴父村上栄
作氏より聴きたる談話によるものにして、長兵
エは朝里村カモイコタン瀬川家に寓し、毎日の
如くカモイコタンより手宮へ通ひ、手宮より石
材をカモイコタンに運搬に従事し(カモイコタ
ン布施渙場番屋土台に使用せる石材は手宮産当

時のものの由なり) 居り、当時村上家は延嘉(現
 信香町) に在りて荒物商を営み酒なぞ販賣し、
 長兵エ此處に立寄り酒を飲むを常例としてその
 際洞窟發見を村上氏に話せしものなりと。而し
 て長兵エは明治九年頃郷里伊勢に帰國せりとの
 事なり。尚村上翁は昭和六、七年頃死亡せりと

(橋本堯尚翁談話)

十九 明治元年穂足内村役人

明治元年穂足内騒動当時の村役人左の通り。

セニハコ 小頭 藤蔵(佐々木)

頭取 友三郎

ハリウス 百姓代 金次郎

小頭 與八

頭取 元吉(野坂)

カモイコタン 小頭 孫吉

マサリ 小頭 治五右工門 (原田)

アサリ 百姓代 利兵エ(徳光)

クマウス 小頭 三太郎 (中山)

アツトマリ 頭取 清蔵 (五十嵐)

百姓代 小太郎 (加藤)

頭取 儀兵エ (堀内)

百姓代 傳次郎 (高橋)

小頭 久右工門

延嘉 小前總代 忠兵エ

百姓代 五三郎

年寄 三蔵 (中野)

名主 兵蔵 (山田)

オコバチ 百姓代 吉六

() の姓は廣ノ調査ナリ

二十 龍眼寺並金刀比羅堂由來

錢函村龍眼寺の由緒は、初め慶應元年四月地藏堂を建立し、明治十二年十二月説教所と為し、同十六年六月、鷲尾山龍眼寺創立の認可申請を為め、同年八月十四日認可されしもの、その系統は小樽市龍徳寺の末寺、鷲尾とは龍徳寺住職の姓、龍眼寺第一世住職は阿部眼龍なり。

金刀比羅大權現の由緒は年代明らかならずと雖も右御堂には龍宮大龍王、金刀比羅大權現、秋葉大權現の三基を祀り、内秋葉大權現は掛抽にして在來のものとし、金刀比羅大權現の像は丈四、五寸の木彫りにして山田吉兵エの奉安、龍宮大龍王の像は丈四、五寸の石像にして張碓村松本徳蔵の奉安と傳へられ、明治九年五月吉日二夜三日の大祈願祈禱を行ふ立札あるを以てして龍眼寺地藏堂以後の事ならん、と現住職笹

尾天龍師の談なり。

昭和九年一月三十日調査

掛抽II掛軸の誤か

二十一 長谷大禪師の定山研究

昭和九年二月五日、余は札幌市南六條西二丁目曹洞宗中央寺に赴き住職尾崎文英師につき、「定山溪開關縁起」の出所を探究せんとせしに、文英師事故ありて會見不能、役僧代りて應接し、師に取次ぎ聞くに、彼の縁起の出所は軽川の祥龍寺住職長谷大禪が調査研究資料を提出せしを編纂したるものにして、其の由緒書は定山溪定山禪寺に納めあれば右により承知ありたし。当寺には何らの記録もなく、彼の獅子面も定山禪寺に納めたりとの事なり。依って直ちに札幌よ

り帰途軽川に下車し、祥龍寺に長谷大禪師を訪ね定山研究の概要を聞くを得、定山を世に紹介したるは實にこの大禪師なることを確めたり。その研究概要即ち左の如し。

拙僧（大禪七十才）は大正年間禪宗北海道十八組に分つてゐる内の第八組に属する濱益、原田、石狩、札幌の四郡を抱括する組合の組長になつてゐた。その時分中央寺の末寺と云つても公称される寺ではなく説教所に過ぎないものだが定山溪の禪寺が管理する僧侶もなく荒れ果て、ゐたので中央寺の住職尾崎文英が、拙僧が組合組長の関係から一つ定山溪へ行って管理してくれんかとの頼みなので、仕方なくこれを引き受け、軽川の当寺と共に兼務したのが大正十二年の事であつた。で定山溪へ行って説教所の整理もし、色々調べましたが第一定山溪の歴史について知つてゐる者が殆どない。この北海道

の名所である定山溪の由緒が不明だと云ふは何たるうかつの事か。よし一つ拙僧が調べてやらうと、それから調査に着手した次第であるが、元々定山溪の開発者は美泉定山と云ふ眞言宗の法印で中央寺の金比毘羅堂に奉仕してゐた事なども聞いてゐたので、先づその定山法印の素性調査と云ふのから始めた訳である。それから拙僧は丸六ヶ月を要し専心、これに没頭しその年定山が渡道最初の久遠郡太田村の眞言寺にも行って調べた。眞言寺では既に三代も住職が変わつてゐて調査に困難をしたが古い記録によつて定山がゐた事が判つた。それによると定山はこの別当になつたが、前の別当の世継ぎが確定しなかつたが故に仮に別当となつてゐたものらしく正規な世継ぎが確定したので二、三年後にその寺を出て西海岸を布教しながら張碓村へ来たものである。拙僧が張碓村の事蹟調査に行つ

た時、何處で調べたら判るか見当がつかなかったが、**佐川三之吉**（大禪が調査した翌大正十三年六月、七十五才で歿死）とは知合いであったので行って訊くと、それは野村治兵工方にゐた法印の事で張確地藏堂前に萬靈塔を建て、ある事が判った。そこで野村の孫と云ふ家へ行って尋ねるとその法印が置いて行ったと云ふ品があるとして佛壇の引出しから出して來たのが一個の古ぼけた小さな竹行李、その中から出たのが實に貴重とする定山の遺物であった。曰く定山の着した法衣と安陀衣、定山自ら彫刻した弘法大師木像（高四寸位）と版本三種、この品々は目下定山禪寺の寶物となつてゐる。それから萬靈塔をも見たが、これには定山の名も年號も彫つてあつた。その外定山について調べた事は中央寺の尾崎住持の書いた通りで、あれは総て、拙僧が資料を提供した次第である。さうして翌大

正十三年十月九日、十日の両日定山溪で盛大な定山祭を行ったが、これは拙僧一人の力では容易でなかつたので当時月見軒と云ふ茶屋の主人**芦田甚三郎**と云ふ者が大いに力を注いでくれて二人の力でお祭が催された譯である。それ以來毎年十月九日、十日を例祭日にして毎年拙僧に招待狀をくれ、支障なき限り出席してゐる。その芦田と云ふ男は今は故人になつたが、先年定山溪へ行ってみると停車場から橋の方へ降りる所に大きな立札があり、それに定山溪の由來が誌されてゐるが、拙僧の名も芦田君の名も書かれてないので、甚だ不都合千萬と思ひ、定山溪の區長をしている**牧野嘉助**と云ふ男に大いに談判した事あるが、未だにそのままになつてゐるやうだ。拙僧は大正十二年から昭和五年迄八年間定山禪寺を兼務したが中央寺の僧侶**井川道流**に後を委せて置いたら道流は無断で現在の管理

者大瀨玉宥に権利を譲渡したのであった。拙僧の妻は病人で現在定山溪に住んでゐるので拙僧も月に一度位は行っているが、尚委細の事を知りたいならば定山禪寺にある尾崎文英が書いた巻物（長九尺程）を一覧せられたのである。（以上）

尚大禪和尚は張碓にある萬靈塔は定山を記念する唯一の遺物なればこれを定山禪寺へ移したらばと考へ居れりとの事故、余はそれは絶対に中止して欲し、この萬靈塔は朝里村郷土史を飾る唯一の遺蹟なりと主張し大禪の意志を翻せしめたり。

安陀衣アンダエ 【安陀会】 梵語 *antavasa* 內衣・中宿衣・下衣と訳す）三衣さんえの一。五条の袈裟けさ。行李リョウ 旅行用の荷物入れ。竹または柳で編み、つづらのようにつくつたもの。衣類入れにも使う。

二十二 白濱園太郎翁の談話（再）

昭和九年三月二十四日再び白濱園太郎（七七）翁の談話を聞く

父園松は石狩の役所に勤めし明治元年彼の箱館戦争の時井上弥吉が張碓村西谷嘉吉の義侠により一冬山中に隠れしことあるが、その時井上と共に園松は和宇尻山中に隠れ居りしものなり。即ち井上一人に非ざることは自分は母よりよく聞きたるなり。而して翌二年三月井上は手宮より船に乗り青森に渡りしものなるが、その年以來父園松は錢函に止まりしものと思ふ。大正七年及九年に井上は山口より來道し石狩町に赴きしと聞くがその途次西谷嘉吉の遺族を尋ねしとの事なるも、尚その外に横山八太郎の家族をも尋ねしなり。この横山は当時アイヌの通譯をなしたり。その家族は目下旭川に居住すと。井上

はよく子供を愛し、自分らも子供の頃よく井上より「アラコ」と云ふ菓子を貰ひたるものなり。

当時張碓には葛山幸三郎、小樽内川には松井助右工門と云ふ幕府の役人ありき。この松井の遺族は今軽川に住すとの事なり。

父園松が錢函駅通所を經營せしは明治六年なるも、その以前は小樽出張所附なりき。即ち左の辞令を有す。

品物會所手代小遣為惣名代吉人

以召并出張所江可能出候也

四月二十七日

右は明治三年なり。

園松

出張所附手代並申付候事

午 九月

右同年なり

白濱園松

手代差免更錢箱村駅通取締

申付候事

但月給金七圓被下候事

明治六年九月十六日

開拓使小樽郡出張所

右により初めて錢函駅通取締となりしなり。

この駅通所は現在、加我、橋本、宇郷、藤村の家屋までその敷地にして現在藤村横の道路もその敷地内なるを園松は道路として寄附せしなり。

以前は通行屋と称し後本陣となり、貫目改所となり駅通所となる。通行屋前は運上屋なりき。

この家屋はその運上屋時代請負人岡田の建築せしものにして総て檜造りなりき。その間取りは圖面の通りなり。東の方の端の山手の室には三條公泊りしことあり。その向の八疊には黒田長

官泊りしことありき。自分らは台所上の二階に寝起す。この家は平家造りにて屋根は全部轉石を列べたり。白濱以前は堀松定治、その以前は佐々木藤蔵が管理せるも、これらは岡田家の支配人なりき。この建物は明治二十何年かに焼失せり。

和宇尻山ニわうしりやま、春香山の北東の嶺、海拔八五六メートル

アラコニ粗粉、うるち米を粉にした、落雁のような乾菓子
の材料

二十三 天川恵三郎の話

昭和九年三月二十八日午後六時、子供の時間に於ける札幌放送局より、天川恵三郎の熊獲りの話を聞く。

『新聞記事より 昭和九年三月二十八日

模範酋長のお話 アイヌの熊獲り

後六時 天川恵三郎』

天川さんは今の小樽市がまだ「オタルナイ」とアイヌ語で呼ばれてゐた頃、そのオタルナイの酋長の家に生まれたんで、元の名を「イサラ」といひ今の名前は郡役所のお役人がつけてくれたのださうです。

天川さんは小樽の量徳小學校尋常科四年高等科四年を立派な成績で卒業、それから二年間税務署の役人になった、學校にゐた頃、伊藤博文公、西郷従道候、黒田、永山、岩村北海道長官、それから大隈重信候などの前で本を讀んだりお習字をしたりした事が澤山あります。今は濱益村と云ふ模範部落へ移って約四十戸のアイヌ部落の酋長となり、部落民は村を天川さんの名前

字をとって天惠部落と呼んでゐます。氏は當年七十一

さて今日のお話はアイヌの熊獲りの話し、天川さんはアイヌ仲間のうちでも珍しい熊獲の名人で今迄に何百頭といふ大熊を獲りました。あまり澤山獲ったので、數を覚えられなく成つたと云ふ程です。

今日はこの天川さんが熊どりのうちで一番危険な目に會ひながら大熊を二頭倒した時の勇壮なお話です。

天川惠三郎は今年七十一才のアイヌなり。その祖先より代々小樽内の酋長にして熊確に住む。その先祖の頃、熊に関する一の挿話あり。代々これを傳へたり。曰く、小樽内にアサリと云ふ部落あり。ある時その部落のメノコ熊に殺さる。部落のアイヌ大いにこれを怒り総出て熊狩りを

為し遂にこれを射止む。而してメノコの敵を斯くの如く為すべしとて熊の上臍と下臍を別々に割きてこれを土中に埋むべしとの議決す。これを耳にしたる酋長、天川の祖先、それは山のオヤヂ（熊）に對して甚だしき非禮なり、假令人に危害を加へたりと雖も熊に對しては熊祭りまで行ふ慣例さへあり況や死したるものは既に罪消えたるもの、その靈を弔ふべきなりとて、直ちにその場に行き我家に傳はる寶物を汝等に與へんにその熊を讓れよと一同を訓し、傳家の寶刀五十本を分與し、その熊の屍を貰ひ受け我家に持參、その首を刎ね、高く竿に刺して掲げカムイに手向け而して曰く、汝既に死して後までも非禮の取扱いを受けオヤヂの恥をさらさんとせるを我今傳家の寶物を以てこれを止めさせ斯くカムイに捧ぐを得たり。汝靈あらばよくこれを享け、今後我が子孫に至るまで危害を與ふる

勿れど。

右の物語、我家に代々傳ふる所なるに、余が二十五才の時、兄と共に熊狩りに出かけ一頭を射止め、更に一頭を射んとせるに猛然とか、り右の腕に四寸ほどの爪跡をかけられ一生一度の危難に遭遇せり。此の時、祖先より傳へられたる前記の話を思ひ出し、如何なれば我に危害を與ふるぞと思はず叫びしも現世の動物何の肯ぜる所あるなし、余は百二十頭まで數へその後幾頭を射しか記憶がなきまで熊を獲りしもその二十五才の時ほど難儀せしことなかりき。(天川翁は昭和九年六月死亡せり)

札幌放送局NHK、当時のラジオはNHKのみであった
髷に同じ
仮令だとえ

二十四 村井儀三郎翁(八十五)談(再)

昭和九年十月□日

熊確長昌寺の前身は観音堂と称しエイメイ(英明?)坊主と称する坊さんが管掌してゐた。このエイメイ法主以後に長昌寺となったもので寺堂は本堀内儀兵エが寄進したものである。

小樽内騒動の主謀者が斬罪後勝納橋の橋下二間位の箇所へ四人のサラシ首をしたのを見に行つたが一番深い所に吉五郎、次に④、疵金外一名の順にさらされた。

打ち首は江差の由で、函館へ廻され、ば打首にならなかつたのにと傳へられてゐた。



海面

その騒動の時勤番所の当番役人に平田と云ふ者があつて主謀者一名と対面し、願の筋は明朝來れと申渡し、双方何彼と弁じてゐると隣室から小嶋と云ふ役人が手槍をとつてその主謀者を一射しにした。その時その主謀者が「やられた！」と叫んで玄関に飛び出し、かいしゃくをしてくれと叫んだので主謀者の一人が直ちにその男の首を打落して外へ出たが、この時暴徒一味の連判狀を遺失して出たのでそれで陰謀が暴露し、役人は戸障子を明け放つて内部の警戒をすることをなつたさうだ。

勝納川から二軒目に濱屋と云ふ漁場があり疵金はこの漁場の便所に隠れ、その主人がそれを見附けた時、疵金は助けを請ふたものだ。その時主人は承諾の旨を告げ秘かに其筋へ届出で召捕へられたが、この時疵金は主人に向ひ一生の恨みを述べたさうだ。この恨みの祟りか幾年

ならずして主人の長男が濱へ「アカエ」の漁を見に行き「アカエ」の針に刺されて死亡、その後家運振るはず他に轉居して了つたのであつた。

かいしゃく川介錯、切腹する際、とどめを差す意味で首を斬ることを言う。ここでは致命傷を受けたので覚悟してそれを望んだ。

アカエIIあか・えい【赤海鰻魚】：エヒ、アカエイ科の海産の軟骨魚。全長一メートルに達する。体は菱形で、尾部は鞭状、尾部の背面に両縁鋸歯の毒腺をもつとげがあり、これに刺されると激痛を感じ、腫れることもある。

二十五 五十年前の朝里を語る座談會記録

月日 昭和二十四年八月六日午後二時より

場所 朝里中學校

主催 朝里青年會

後援 朝里PTA文化部

出席者 古老 菊池サト（八十五）

能登吉蔵（八十）小松市郎（六十九）

和田幸次郎（六十一）松永安太郎、

牧田佐太吉 牧田妻 木村栄七

青年會長元谷正、開會の挨拶をし、本日の司

會者にPTA文化部長小林廣を推す。

小林廣司會の下に座談會を開く。

○朝里のアイヌ

（菊池サト）

自分は二十六才の頃（明治二十三年頃）來朝したが、その頃朝里にはアイヌは住んでゐなかつた。

（小松市郎）

アイヌは後年まで河原戸長が使用してゐた。

秋元茂吉と云ふ漁場でも使役してゐた。

○熊の話

（小松市郎）

柗里の木村勘七漁場から熊が鮭を雜倉を破つて食ひ荒らし、柗里川の岡崎亀蔵の家のある附近でその熊が死亡してゐたことがあつた。

明治何年頃かはつきりしない。

○名木の話

（能登吉蔵）

自分の裏の崖にある大木は赤タモであるが、これは朝里で一番古く大木だと思ふ。昔はあの崖に三本の大木が並んでゐた。眞中のはイタヤであつたが、明治十九年の友田屋の火事ですのイタヤが焼けて了つた。友田屋と云ふのは秋村福蔵家のことで、今の上林の所に葺家であつた。これが火元で次は小嶋、次は小學校、次は能登、これも葺屋でこの四軒が焼けた。

○異った職業

(小松市郎) 昔は鍛冶屋が三軒あった。菊野初五郎、内山、柴田、この柴田と云ふのは荒濱で、内山は後の内山秀吉の家、後年までカジヤと称されていた。その外、船大工が二軒、砂田權吉、弁と云ふ家であった。雑貨屋は二軒、小松家は明治十八年から雑貨商をした。余佐藤久助の家でもワラジヤセンペイを賣つてゐた。

○チヨン髷の話

(能登)

チヨン髷で一番遅くまで結つてゐたのは自分の父であらう。明治三十二年頃まで結つてゐた。熊碓で床屋をしてゐた飯田國三郎がその髷を切つた。父の名は利吉。

○道路

(能登)

荒濱の向、百間には中腹に通路があった。

○鐵道

(松永安太郎)

自分は明治三十三年四月に保線に入った。(牧田佐太吉) 自分は三十四年十一月に入った。複線になつたのは朝里築港間は明治四十三年、朝里張碓間は翌四十四年であった。線路は本線は六〇ポンド、岐線貨物線は四五ポンドで牽引力は七屯車で二十五車位、走行力は一時間十八哩位であった。

朝里駅には松浦庄藏、品田長太郎、矢沢重次郎等がゐた。高根栄助が岐線でポイントをそのままにして列車が岐線に進入し周章して途中でポイントを返したので脱線し、吃驚して山へ逃げたのは明治三十五年であった。それで首となり後保線に入った。あの事故は保線工夫が仕事をしつてそのままにして置いたのが原因だと思ふ。

熊碓トンネルの上り線が開通したのは明治三

十四年と思ふ。下り線は複線の時開通した。

○教育のこと

(小松)

自分が五つ頃日森藏之助と云ふ人が學校長になつて來た。その頃まだ私學校があつて青山三藏が二百円で校舎を建て、寄附し、太田蕩一郎が校長となつて教へた。主にカモイコタンの子供が私學校生となり自分は公立學校に入學した。明治二十年に町田外也校長が赴任して來た。(當時の免狀提出)能登由藏、秋田某が代用教員をした。

○山の上用水

(小松)

學校前を流る、用水は小松七、八才の頃明治二十年か二十一年に開鑿された。この水で三津、青山が水田を作つた。

○農業

(菊地サト)

自分が來た以前に山の上へ來てゐた農家、牧田甚左エ門、小林宇作は同時に入地、小林宇作は太郎丸の人、安沢から婿に行つたのだが、妻は後から朝里へ來た。

○神社

朝里神社の「正一位稻荷神社」と云ふ木の額を彫つたのは石井幸之助と云ふ人である。毘紗門堂は元沢の現在の竹内源次郎の家の上にあつたのだが後神社前に移つた。これは日蓮宗と見えていつも太鼓をたゝいてゐた。朝里神社の祭礼に出る奴は有名で小樽の住吉神社の神輿にも朝里奴が出なければ神輿が出ないと言はれてゐた。これは昔、太田の別当が教へたものだと云ふことだ。(太田の別当とは定山法印のことである)

○温泉

文治沢の熊の湯温泉は明治三十年頃石田義觀と云ふ人が開發して三十四、五年頃から盛んになり四十年頃まで續いた。鷲田筆五郎家と石田とが別懇であった。石田は死亡したが、その妻は今でも南部の花巻に生存してゐる。石田は元量徳寺の僧であった。

松の沢鑛泉はヤッポリの湯と云ふて小樽から來たヤマシ者の坊主で随分一時は盛んなものであった。和田家では十字路に出店を出した位だが店を出した翌日この坊主は軽川へ引揚げて行った。光風館を開發したのもこの坊主だと云ふことである。

○歌舞音曲

木村三郎の太鼓は太田の別当から習ひ、中島又三郎の父の笛は増山久作の父から習ったものである。

○漁業

朝里でも昔は鮭が漁れた。カモイコタンにコ、柁里に玉樽見、それから青木吉太郎等大謀網を建てた。

(小松)

自分七、八つの頃、牧田の妻が自分の家にゐたが、一緒にカモイコタンへ鮭買ひに行き雄(ピン)一尾八錢で買って來たものである。

○海運

三國、佐渡、敦賀方面から大和船がこの朝里海岸までやって來のは明治三十七年頃までであった。主として酒や藁工品を持って來て海産物を積んで行った。

鮭川かずのこ

光風館明治二十五年、小樽の東幸三郎という実業家が開業。現在の札幌市手稲富岡バイパス上

茸家川萱茸きの家の意か

百間川朝里一丁目から朝里川の向側、熊碓側海岸の通称「百間柵」

哩二マイル、一哩は一、六〇九三キロメートル

ポンド二二四頁参照

周章二あわてる、うろたえ騒ぐこと 周章狼狽

二十六、徳光喜三郎翁談

昭和二十六年十月三日

船濱町踏切附近の喜三郎翁宅にて、翁（八十

一）妻ナル（七十八）、妻病床にあり、翁語る。

自分は現祝津町の豊井で、明治四年、漁業家徳光清次郎の二男として生まれ、朝里の徳光久吉方へ来たのは、明治二十三年、二十才の時であった。この久吉は仲々の豪家であり豪腹な男で玉の本家であり、当時弁財船二隻、大和船二

隻を所有し、函館や福山から物資をどんどん船腹で小樽港町の船附場に陸上げて、朝里から銭函へかけて漁家にどんどん貸付け、鯨が不漁のときは何年も催促しないものであった。そして漁があった時は利息をつけて回収したので、富が殖えるばかりであった。その後明治三十年頃であったか、北見の枝幸へ移り、そこで駅通所、郵便局を開き、尚呉服雜貨商まで開いて大した勢いを張ったもの息子の久太郎が金覆輪の鞍をつけた馬上に跨り枝幸の近郊を歩いたのもその頃、玉の印のある紙片を持って他家へ行けば文句なしに現金に替えたほどの豪勢さであった。所が息子久太郎がその頃枝幸で北見商會と云ふものがあり、その支配人で但馬と云う男に騙されたのか枝幸で鯨定置を十八統も経営し、尚鯨定置もやってどれも失敗しそれが切っかけとなって遂に破産することとなった。その頃は汽船

買切りで漁夫や物資を枝幸へ上げたものであった。自分も凶徳光清太郎と共に二年ばかり枝幸で田の仕事をしたのだが三年目に朝里に帰ってきた。この久吉と云ふ人は七十才位で朝里で死亡した。現在の小樽郵便局の建つてある土地やその下の拓銀の敷地などは昔の田の土地であった。凶徳光清太郎は久吉の甥であり久吉の父は利兵エと云つたがこの人は朝里には定住せず多く福山住ひであった。自分の妻ナルは徳光卯三郎の娘で卯三郎は荒濱でしころ屋と云ふ宿屋をしたのは事實であるが荒濱で汽車を停めて乗客をのせたのは記憶にない。自分の父と卯三郎の相続人とは同姓同名である。

豪家||富貴で勢力の有る家

豪腹||業腹(すぐく腹が立つこと。しゃくにさわること)か

金覆輪||ふち飾りを金メッキしたもの

しころ||鍬、兜の鉢から垂れて首肩を覆うもの、転じて鍬のように重なった屋根を鍬屋根という、鍬屋根の家であったか。

二十七、菊地サト媪(八十七才)の談

昭和二十六年十月四日

自分は二十六才の時(明治二十三年)朝里に來た。父は安沢の小林喜助と云う、來住同行者に村の牧田太市、伊藤直松(この直松は奥沢に住し後黒松内に移った)早見重左エ門の妻おみん(これは小林與三太郎の従妹)等と一緒に居た。初め牧田甚左エ門方に同居し、間もなく菊地音吉と夫婦になり荒濱に住した。

音吉はすぐ朝里駅に勤務したが數年後紅葉山駅へ転勤を命ぜられて赴任したが自分はこの土

地より離れなかったので鐵道をやめて帰ってきた。(音吉は昭和十一年三月朝里で死亡)

当時荒濱にしころ屋はあったが宿屋をやめていた。その家屋を星置へ賣ったのは事実である。

(二十三年まで経営)内地で友達であったアナタのおぎのと云ふ女がこの荒濱の鹿内金太郎と一緒に住っていたがこの夫婦は丑のいる北見枝幸へ移って行った。当時の駅長は柳田と言った。

キ佐藤留吉の妻の兄である。柳田の次が神崎だと記憶している。共成精米場が流失した時は若い者の住んでいた家屋も流れその家族二名が流されて死亡した。朝里橋も流失して船でお客を海岸渡しをした。当時朝里駅には松浦庄蔵もい

たが松浦は後年岩見沢駅へ転勤となった。榊原久太郎は沿線を廻る踏切番であった。榊原の次が稗田市太郎、その次は東館佐太郎である。榊原の前に砂賀永八が踏切番だった。(「柳田と云ふのは佐藤君の母の妹の嫁した家である」と佐藤藤吉君の話)

安沢||福井縣坂井郡春江村字安沢(現春日町字安沢)

アナタのおぎの||不明

一 ハイカラ饅頭の由来

吉田藤太郎 談 六一才

昭和二十六年十二月十五日

於錢函の自宅

自分は福井縣坂井郡本郷村字中平で明治二十四年生まれたが、自分の父は太平と称し、明治三十年頃、単身北海道へ渡り膽振の追分に落付いた。当時追分保線の主任格の人に大學を出たばかりの大村卓一と云ふ人がいてこの人も福井縣人なので父と特別の親交を結ぶようになった。

そこで父は大村の口添えで追分保線の工夫に採用され官舎住ひとなったので明治三十一年頃母は子供達を伴ひ追分に来住した。然し、いつまでも保線工夫をしてもいられず何とか商法で身を立てようと大村に相談したら、大村は間も

なく札幌の本局に転任となり、非常に重い位置についていて（三十一年の大洪水で由仁の鉄橋が落ちたのを大村は他人の及ばぬ技術で短時日の内に復旧させたので、その技能を高く評價され本局詰めになった。）北海道にはまだ駅の呼賣商がないが、一つ札幌か小樽か室蘭の三ヶ所の内での賣店をしたらどうかと言われ、当時の發展性は小樽であるが見通して小樽を貰いたいとしてこの事を当時の小樽駅（否、当時は住吉駅であった）駅長に相談をかけたところ、駅長は現在のところ呼賣商の必要がないとの返答で遂にこの話は中絶した。所が大村はその駅長を他に更迭させ、後任駅長が承認したので住吉駅で駅賣を始めることとなった。この以前父は小樽の開運町五丁目、本願寺別院前の家に住み餅屋を始めていた。その餅を駅で賣ったが評判は悪くなかった。開運町の家は自分の後に原田栄助

が住むこととなった。明治四十三年頃となり手宮札幌間に電車問題が起きたが、札幌鉄道局では電車の代わりとしてハイカラ列車と世間の人々が称する列車が運行することとなった。この列車は二等待遇の三等ボギー車三輛を連結して手宮札幌間を準急的速度で駛るので、その快適さは頗る世間に評判がよく、日露戦争後モダンと云う意味をハイカラと云う言葉が馬鹿に流行ったものだ。そこでこの列車もいつしかハイカラ列車と名づけられて了ったが、これに着目した父はこのハイカラ列車と並行してハイカラ饅頭を賣り出さうと考へ付き、当時入舟町にネボケ堂と云う菓子屋があり、その職人に大阪から来た若い者がいて、その男の作る饅頭は頗るうまいので、父はネボケ堂に交渉しこのハイカラ饅頭製造に協力を求めた。ネボケ堂の主人もその職人も父の熱意と考案に大いに共鳴し早速

製造に着手した。その饅頭は色を茶色とし、形を栗型とし殆ど栗饅頭の様にして作り試食してみたら頗る美味いので父は思い切つてこれを大量に鉄道管理局の要路や小樽駅長を介して関係方面に試食して貰った。幸いにして江湖の喝采を拍したのでこれをボール函詰めとし、上紙を刷つて一函十銭で歩廊賣りを父自ら実行した。

今でも父の駅賣り姿が眼に浮かぶ。これが明治四十三年であった。値段は後で一函十五銭としたが小樽札幌間での名物となった。

父は大正十四年伊勢参宮に行き伊勢の津で發病、自分が枕頭に急行したが遂に同地で四月二十一日七十六才で死亡した。

開運町の原田栄助は自分が神工園を經營していた当時三年ほど神工園へ来て風呂焚きをしたものであった。原田は間もなく死亡し養子要件の世となり今は最上町に住んでいる筈。

住吉駅⇨現南小樽駅

駛るはしる

神工園⇨張碓にあった料理旅館、現バス停に其の名をとどめる

二 青山三蔵強盗に襲はれし話

水間ヤノ（七七） 談

昭和二十七年三月十日

於 水間喜作 家

あれは確か友田屋の火事のあった次の日の晩であった。（友田屋の火事は明治十九年八月二十六日で当時小學校も焼けた）私が十か十一の頃でよく覚えている。

賊は一人であったが日本刀を振りかざして侵入した。当夜播摩甚六の長男で竹松と云う十九

か二十の青年が家に泊まっていたが、賊はこの竹松の脳天を三刀あびせ三つに割って即死させた。それでも父の三蔵は勇敢に賊の前へ出たところを賊は日本刀を横なぐりに拂ったので丁度口中に入り歯を全部くだき頬にまで裂傷し、尚一刀を左の肩に打ち込んだ。そこで父は驚いて外へ飛び出し、血だらけになって下の亀谷藤次郎方へ飛び込み助けを求めた。父が朝里へ移住したのは亀谷の奨めによったもので、亀谷は草鞋脱ぎの家であった。亀谷でも驚き早速父の手当てをし、担架にのせて小樽の病院へ運び口辺を縫ふて貰った。そのため父の顔は変な見にくいものとなった。

一方父がとび出した後の家の者は驚怖のあまり全部家を脱れて隠れた。その後で賊は家の中で大暴れに暴れて箆筒だの長もちだのバラバラにこわしてしまつた。自分の姉のミヨと云うの

が丁度自分と九つ違いの年頃で賊は姉を追いかけたらしく、姉は裸足で逃れ、丁度今の三津の前のあたりに栗畑がありその栗のうねの中に隠れていた。自分は子供であったが、今の学校の校庭のところ駐在所の下手あたりに石橋喜兵エの藁屋があり、石橋の婆さんが自分を負ぶして石橋の家まで避難した。それから近所の者が大声で泥棒だ泥棒だと叫んで騒いだので賊は一物も盗らずに逃げて了った。母は後で石橋へ来て自分らと一緒にになったが、それから石橋を出て江上宇平の家へ行った。ここへ姉のミヨが逃れてきてまた一緒になった。江上の向いに林多左エ門の家があった。

賊の正体？それは後で判ったのだが、今の鎌田の本家の家の（以）前に室谷吉兵エが住み、その室谷の（以）前に浜田と云う男が住んでいたが、この浜田の仕業と云うことが露見した。

と云うのは、浜田はその晩近所の人が出て騒いだが、浜田の顔だけ見えなかったことと、その頃まだ男は鬚を結っていたのだが、浜田は次日すっぽり鬚を切って顔を変えていたし、姉のミヨは美人であったのでミヨを狙っていたのでなかったかとも思はれ、何よりの證據は室谷の住むようになって家を造作したら圍爐裏の底の土砂の中からさびた日本刀が一振り現れたことで犯人は浜田であったか、なるほどさう云へばあの晩浜田が出て来なかったのは怪しかったと一同初めてびっくりしたのであった。尚、犯人は一人でなく今の新谷家の所に島山と云ふ男が丸小屋かけて住んでいたが、その男も共謀者でないかとの噂もあった。事件が終わって家へ行ってみると丁度夏の蚊のいる時だったので蚊帳を吊っていたが、その蚊帳が刀でズタズタに切り破られていた。吃度姉が寝ていると思つての

仕業であったかも知れない。

〈小沢三次郎（五七）談〉

亡父から聞いた話であるが、この青山事件のあった晩、父は下の海岸通りに丸井由松の浜小屋があつて、父はそこで寝ていた。丁度友田屋の火事後であつたので、まだあたりは後片付けもしていない状態であつたが、その夜の深更、その丸小屋へのっさり入つて来た一人の男の顔を見ると顔面一面血だらけになつて丸裸の禪一貫、その形相の物凄さに流石豪膽の父石松も一生に一度の仰天をした。入つて来た男は三蔵であつた。そして青山一家は賊のため皆殺しに會つた、と叫ぶ。三蔵は亀谷へ行くつもりで山の上から下りて来てこの丸小屋へ入つたものであらう。何しろ石松も由松も三蔵の血だらけには吃驚したとのことであつた。由松は友田屋の船頭であつた。

新谷の家の所に住んでいたのは畠山でなくてダキ山と云う男であつたと思う。ダキ山とはどう書くのか判らない。

（鎌田の本家の家は既から出火し昭和二十七年三月十三日午後五時母屋共全焼、飼馬一頭焼死した。小沢談は誤、新谷の所にいたのは畠山幸さんと云ふ男、ダキ山とは家印で錢函に移つた岸田辰弥のこと、大平のところに住んでいた。）

友田屋の火事Ⅱ（能登吉蔵談）友田屋は、秋村福蔵家のこと、今の上林の所に葺家であつた。これが火元で次は小嶋、次は小學校、次は能登、これも葺屋でこの四軒が焼けた。（明治十九年）

草鞋脱ぎの家Ⅱ移住者が初めに世話になつた家

丸小屋Ⅱ丸井の小屋の意か

ⅡⅡだきやま、家印

家印Ⅱ商家、漢家等でその家を表す簡単な記号

三 神威古潭全盛時代

渡辺仁多吉（七一）談

昭和二十七年四月十日

カモイコタン^カの渙舎にて

私は明治十五年この神威古潭で生まれ今年で七十一才になる。その間カモイコタンの変遷も目まぐるしいもので今では西村富三郎、小山定美、筒井栄作の三軒より常住している者はなくなったが、全盛時代には三十七、八軒もあったものである。それは確か明治三十七、八年の日露戦争時代が一番戸数が多かったようだ。その時分の屋並を数えてみるのも一興であらう。

先づ、一番東側の崩れの端にあったのは、浪岡豊作家である。その次は竹内角太郎、次は瀬

川藤四郎、この藤四郎の娘は村上へ嫁に行ったリエ婆さんである。それから瀬川倉吉で、これは現在の倉次郎の先代である。次は私の家で渡辺多助、それからまた瀬川富蔵、續いて出頭萬太郎、本間宇三郎であるが、この宇三郎は本間三郎の兄である。次は福田屋と称する福田清吉、それから久家喜平、この久家喜平の前に別家の久家寿三郎の家があった。その次には佐々木正人と云う家があったが、その息子は後年札幌駅長をした男である。（現在星置に居住する佐々木正之であらう）次は今丑松、斉藤熊蔵、村上勇次郎、これは村上與助の先代、續いて伊藤賢蔵で現在後藤多三郎の渙舎のある前であった。この伊藤は夕張に移って酒屋を開業し資産を成して町會議員にもなった筈。伊藤の隣が後藤嘉助で、この娘ツタの婿が私の弟の多三郎である。それから高橋銀作、滝川福松、この滝川福松の

息子が弁蔵と云ひ若い時は菊八と称したが、後年鬼鹿神社の神官となつて移つて行った。

それから田村栄助、久末利助となるが、この久末利助は後年朝里へ移り（現在の山林安太郎の所）また熊確へ移つた。若竹町の笹浪樹之丞の養父である。久末の隣が北川藤四郎で、今組合の常務理事をしている北川清次郎の養家である。次は橋本万之助、岡部忠右エ門、岡部喜三郎となり、それから今一族となる。即ち、今平助、今三太郎、今三之助と三軒並び、それから神田一族の神田宇三郎、神田才吉、神田岩吉、神田啓次郎と四軒もあった。この岩吉の息子菊太郎は苗穂工機部に勤めているし、弟息子の次郎は永らく築港駅に勤め、音北姓を名のり鉄道をやめて軽川にいる。

神田啓次郎は鉄道の踏切番をしていた。この啓次郎の家に（坊）がいたものであつた。この岬を坊家

の岬と言ふ。坊とは仙台坊と言つて祭文語りする座頭の坊のことで神田の身寄りにその坊がいたのである。あの岬に庚申様を祀つてあるがこれも坊家でお祀りしたものであつた。神田一族の次は外(ウツチ)の湾(ワタ)となつていて渡辺惣太郎、この惣太郎が朝里へ移つてから、その後へ渡辺善作が住んだ。夕(ユフ)渡辺の家があつてそれから、禿(カハゲ)福田傅治となる。この次は又(マタ)齊藤、△(イノ)徳光と云ふ順になるので後は桎里(キツリ)である。これをザツと数えても三十五、六軒となるが、これが明治三十、七、八年頃の全盛時代、このカモイコタンの顔役世話方をしていたのが先には福田清吉、それから久家喜平であつた。

知、外、禿、夕、の、△、■(タマ)、たじめ、いちさき、たいち、のいち、やまいち、それぞれの家印

四 毘紗門堂のこと

新谷久五郎（六二） 談

昭和二十七年四月二十三日

於車中

昔、山の上天満宮（現在の朝里神社）前にいた毘紗門堂は確か奥野と云う人でなかったかと思う。法華宗で太鼓を叩いていた。羽毛書が得意でお祭りの燈籠額によく書いたものだ。そして読み書き算盤も出来たので習いに行った子供もあった。その一人に死んだ店の親父（末松）も習ひ子であった。今でも毘紗門堂の植えた杜若の花があの家であった前の川のほとりに残っている筈である。

毘紗門堂の前の土地は龍山雷雲の土地であるが後に雷雲の娘の鈴木ソヨの名目になっていた。

あの土地にある梅の木は確か水間忠右工門が植えたものと思う。水間の後には金岡忠作が住んでいた。水間のいたのは五十年前である。

（右の梅の木の一本を、現在の中田仁太郎から五百円で求め筆者の屋敷内へ四月二十五日移植した。毘紗門堂は石井高政と云ふ人であったようだ。 廣 考證）

羽毛書||刷毛書きの誤りか

刷毛書||はけ、がき、文字や絵を刷毛で書くこと。また、刷毛で書いたもの。

杜若（とじゃく）つゆくさ科の多年草。やぶみょうがの別名。我が国では誤ってかきつばたの別名ともしている。

龍山雷雲||西本願寺輪番。龍徳寺住職有田法宗が、病める貧困者を救いたいとの一念より、施療施薬を發願し、檀徒であった福原資孝氏等と相談し、福原医院に施療所を創設、更に医師木村倫太郎、原田元貞等と語らって、明治三十五

年、小樽區住之江町に小樽施療院が開設された。現在の協会病院の前身。(小樽医師會史 一九五七年刊)

五 朝里山の上馬糧飼草運びのこと

井原喜作(七二) 談

昭和二十七年四月二十九日

於 井原家

私は郷里石川縣から三才の時(明治十六年)この朝里へ移って来たのもう七十年になる。私が馬追いをしたのは二十才頃から三十五才までの十五年間位でその頃私の家には成馬が十四頭その外幼馬が澤山いたものである。毎年小樽の共成株式会社へ飼草を請負って納入したもので、当時奥沢の共成精米所では馬が四十頭もいて浜から工場、工場から停車場と馬車ばかりで

運搬していたのでその飼料ばかりも大した必要となる。そこへ朝里から飼草を夏秋共運んだもので飼草は一頭の駄馬に七十二束をつけ十四頭で一圃に千束運んだものである。そして冬になると馬を下場所へ越年にやったもので馬も放牧で冬期を過すのであるから痩せて春先戻って来るのが可哀さうなものであった。下場所と云っても主として白老と社台で安平へ三年やったこともある。ある年、馬をつれて出發した時錢函の星置滝の下で一泊することになった。その夜馬が放れて附近の農家の畑に積まれてあった豆を喰い荒らし大いに談判を食って金子十五円請求された。当時馬一頭の価格は四十円で、十五円は二才馬の値段なのでそれでは二才馬一を受け取ってくれと交渉し一頭渡して翌日出發したが、翌春その馬が三才馬となって大きく育っているのを見て惜しい気がした。

私が漁場へ行ったのは十一年間㊦猪股漁場へ行ったもので、どうして十一年限りでやめたかと言え、丁度その年（大正七、八年頃であったか）春先㊧漁場の磯舟乗りに金助の姉ヤナ子の亭主で中山宗太と云うのが徳光喜三郎、勝次郎父子と磯舟で難船し、丁度眞晝間であったが、役場の前浜で勝次郎は泳ぎつき、喜三郎は助けられたが、宗太は遂に浪間に没し、翌朝福士の裏へ死体となって上がったが、その宗太の遺族に対する弔慰の方法を猪股で講じてくれなかったので、それが私の意に充てず遂にそれきり船頭をやめて了ったのであった。その後、㊨齊藤の船頭に請はれたが行かず、永山久太郎と小松さんの刺網をやったりした。

安平㊩早来町安平

福士の裏㊪朝里海岸、現朝里駅の前、福士家があった

六 朝里山の上に住んでいた頃の話

水間初五郎（七九） 談

昭和二十七年五月七日

於 豊倉 水間の家

私の父忠右エ門が山の上の井原の上隣に住んでいた頃は私が二十七、八の頃であった。その家は神威古潭のある漁師の家を買って建てたもので、そこには二年ほどいて、その家を前田清左エ門に賣り父は天満宮前の龍山の土地に移り住んだ。然しそこにも二、三年より住まず、當時私は父と別居して松ノ沢に一家を持っていた。その頃私の妻が死亡したので父母は間もなく松ノ沢の私と一緒に暮らすことになり、松ノ沢でも二、三年いてそれからこの豊倉、その頃は矢別と言っていた。この地に移り父母はここで死

亡した。

龍山の畑には私の父母が住んでいた頃、既に梅の木があり三本ほど實が成っていた。あの梅の木は父が植えたものではない。

毘紗門堂が天満宮前にいた事も知っているが、姓名の記憶がない。よく屏風や掛け軸を書くのを頼まれたと見え、需めに應じて書いてやったもので、確か笠原虎三さんも書いて貰った筈、今でも保存されているとすれば或いはそれに名を書いてあるかも知れない。笠原さんに聞いたら判るでしょう。

笠原虎三の上にした事もある。その家は三方に石盛りがあり拜み建ての藁屋で前に小川があった。その家に私達の後に小林與三太郎さん一家が入った。

昭和二十七年五月十一日
於 中田畑

自分が内地からこの土地へ来たのは十才、即ち明治二十四年の年であったが、その頃は山の上には数えるほどより家がなかった。

毘紗門堂がこの土地にいたのはほんの二三年のこと、確か仙台の人であった。その後、山方面へ移って行ったが名前は何と云ふか知らない。

八 神威古潭全盛時代補足

久家寿雄（六九） 談

昭和二十七年五月二十一日
於 カモイコタン 〔〕 渕場

七 中田仁太郎（七一） 談

神威古潭の全盛時代は自分の子供の頃で殆ど家並と言ってもよいほどだった。その例として自分の家の筋向かいに青木吉太郎（乙松先代）漁場の番屋があり、その前は廣場になっていてお盆になるとその廣場で盆踊が立ち二重の大輪になって踊ったもので自分の姉二人も踊りに出たものであった。踊りは「イヤサカ、サツサ」であるが太鼓を叩いて賑やかなものであった。

神威古潭に踊りがあるとて朝里榎里からも踊り手がやって来て加はったものである。

それから札幌駅長をした佐々木正之の少年時代はその青木漁場に佐藤平作と云う親方船頭がいて、その人に佐々木の親が使われたものらしく正之は自分より五つ、六つ年下であるがよくオンコ、オンコと呼ばれていた。オンコとは次男、三男の呼び名で、正之も多分次男か三男であったのであろう。それは明治三十一、二年の

頃と記憶している。それから神田の坊と云うのは名前は知らないが張碓山の上に常丸と云う浪花節語りがいて、その常丸の弟子となって浪花節や祭文語りをやり藝名を橘圓松（エンショウ）と名乗っていた。

□川角鱗（かくうろこ）の家印

九 私の経歴

木下由太（六九） 談

昭和二十七年六月四日

於 山田町木下疊店

私は明治十七年福井縣坂井郡春江村藤鷲塚で生まれた。北海道小樽へ渡って来たのは私の十才の時、即ち明治二十八年である。丁度日清

戦争終結の年で私の村からも出征した者が凱旋すると云ふので二里もある森田の町まで出迎えるに出たことを覚えている。

小樽に来た初めは奥沢にいた。私より、五、六年前に私の祖父が小樽へ来ていて、その時私の兄の竹三郎が祖父と一緒に渡道したのであった。兄の竹三郎は現在尚達者で新富町でコンニャク屋をしている。朝里の井原や小林米吉などはその兄の家と縁續きとなっている。私は両親と一緒に渡道したのであった。当時の奥沢はまことに淋しい農村で福井から来ていた小林その他数人がおり、主に福井縣石川縣の者、沼田喜三郎や京坂與三太郎等も奥沢に住んでいた。私の両親は当時馬車屋を業とした。

それから成人してこの山田町へ移ったのだが山田町へ来てからも五十年になる。当時の山田町で職人家業は私一人で他は何れも道具屋と古

着屋ばかりで前垂掛けか長袖で暮らしていた者である。山田町と云うのも山田吉兵エの土地を町名にしたもので当時山田吉兵エは小樽の區長をしていて家は今の踏切の側の向こふ側であった。思へば隔世の感である。私の家印は⊕である。

十 蛇柳の話

中田末蔵（二八） 談

昭和二十七年七月六日

於 中田末蔵宅

私のこの家の骨組みの材料は昨年水源地附近の中谷長太の家を買って来て建てたものであるが、この位置を定めて地均しをし土台石を据えていた時のこと、昨年八月末頃であったが、

あそこの梅の木の附近で一吹して、この家の角にあるこの柳の木を何気なしに見ていると黒いものがスルスルと動いているので何だろうと不審に思っ、よく見るとそれはとてつもない大きな一匹の蛇がこの柳の木に上っている、折から夕日を浴びてキラキラと背中の中ウロコに映えてとても凄いいものであった。それからその蛇の行動を見ていると柳の木が二股に分れ一本は東の方へ延びて青い葉枝となつて下り、西の方のは枯れ枝となつているので、その枯れ枝の方へスルスルと這いながらだんだん身体が消えて行くので、おやおやと思つてよくみるとその枯れ枝の頂上が雨露のため朽ちて穴となつており、その穴の中へ入つて行くのであった。それを見ると思はずツツとした。これは大変、こんなところへ家を建てたら時には家の中へも入つてくるかも知れない。いっそのことこの蛇を退

治して了つた方がよい。それには先づ、この柳の木を伐り倒すことだと、その日の内に鋸でゴシゴシ地上二尺のところから伐り倒して了つた。この枝垂柳は今から六十年前塩谷網五郎（一名土谷とやさん）と云う爺さんがこの土地に家を建てて住み、その爺さんが植えたものである。その伐り口は直径一尺二寸あった。さて、どうと倒れた柳の大木、然し蛇は一向に出てくる気配もない。それから鉈で小枝を刈り拂い幹ばかりにしてそれを三つ四つに小切れとした。ところが西側へ延びた朽ち枯れた大枝をゴシゴシ切りまくつたところ、奴さん中に入つていたもので大きな青大將の胴を眞二つに切つて了つたものだ。だからだと赤い血をたらした物凄いい胴体がぬらりと垂れ下がつた時には思はずぎよツとしたが、切つて了つたのだから命がある筈がないとそれを引き出して始末しようとかかつた

ころ、これはどうだ。更にもう一匹の大きいのがぬらぬらと這い出して来たではないか。思わずアッと叫んで二、三步とび退いたが既におそい、奴さん俺の両足にとぐろを巻きつけやがった。これは油断ならん、何か棒切れでもないかと器物を探そうとそこらを見廻したが何も無い。遮二無二足を振りほどいて器物を探しに歩いたとき奴さんするとそこらの柳の小枝の青葉の中へ姿を隠して了った。それでも薄気味が悪くこいつをこのままにして置くとどんないたずらをするかも知れない。探してバラして了はなければ気が落つかぬと、そこらをあちこちと探したが遂に見失って了ったので、今でもどこかにいて自分の夫なり妻なりを探してこの辺へ出てくるのではないかと薄気味が悪くて仕様がな

い。
この柳の木に以前桜鳥が巢を造っていたと云

ふので奴さん桜鳥の卵でもとりに上って来て格好な洞穴があったのでそれを常宿とし夫婦とも何年となく棲んでいたものと思う。その青大將は長さ一丈以上のものであった。ところが柳の木を伐ってから三日目その附近を見廻ったら丁度その位の抜け殻が長々と草原に横たはっているではないか。畜生、ここにいたかと思ったらぬけがらであったので安心したが、そのぬけがらは柁里沢の別家（中田由太郎）の息子がくれと言ふのでやったら喜んで持つて行った。

一吹||一服の誤りか

桜鳥||桜の咲く頃に飛来するずんぐりとした黒い鳥、椋鳥
東北（岩手、青森、秋田など）の方言

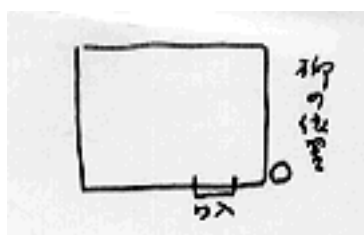
ぬけがら||蛇の抜け殻は疔取りに効果があるという俗説

追記

これは筆者（小林廣）の思い出

私が十六才の夏、即ち明治四十三年のことであるが、私の父母がこの土地に續く軍用道路に面した村林下駄屋の土地を開墾したことがあった。その時私も鎌を持って草刈りを手傳ったが、その仕事の合間に軍用道路を歩いたら眼前にとつともない大きな青大將が一匹長々と横たはっているのびびくり仰天、どんな思いで逃げ戻ったか知れなかったが中田が切った青大將はてつきりそいつかも知れないと思ふので、私は中田にその柳の木に注連を張り蛇の供養をしてやれを忠言したのであった。私が青大將を見た日、鎌で左の人差し指を切った傷あとが今に至るまで薄く残っているので當時を思い出す痕跡としている。

注連||注連縄（しめなわ）のこと



十一 自分の来住の頃

三津吉高 母 スイ（七三） 談

昭和二十七年七月二十二日

於 三津家にて

私は二十才の二月（明治三十年）郷里能登からこの土地へ移ってきた。先代の孫三郎夫婦は（その）十年前にこの土地に移り、十年目に姑

が郷里へ帰って、是非私を息子外松の妻にと囑望されてその姑に連れられて来たのであった。当時ここには農家はバラバラと数えるより外なく、この土地も先代夫婦が丹精して拓いたとのことである。私の家の裏には林檎園となっていて美事な花を咲かせていたが、数年後カイカラ虫にやられて皆伐り倒して了った。当時の樹木で唯一本残っているのが、この裏手にある梅の木で、これは先代が移ってくるの間もなく植えたものとの話であった。

(植樹したのは明治二十年であらう)

十二 土場町の思い出

本多清治郎(七二) 談

昭和二十七年十一月七日

於 本多家

私は明治十四年此處で生れた。祖父桂次郎は、明治四年に潮見台の開拓使官宅に来て、翌五年、この土場町に家を建て、裏に窯場を築いて陶器製造を開始した。祖父の技能は仲々勝れていて、博覽會に出品して度々賞を受けた。

土場町の思い出、日露戦争前後、自分の一軒置いた下隣に鋳力屋があったと言われるが、その記憶がない。と云うのはその頃私は数年間他へ出ていたからで、多分それは、その後その位置に石倉が建ったがそこであらうと思われる。

その頃の土場町の開運町の角は、棒田市太郎と云ふ家でこの棒田はその後漁業をし勝納に移った。棒田の隣(開運町寄り)は橋本と云う葉屋、その次は中△(ウロコ)向井商店の間口の廣い呉服太物洋物の店で中△は△とも云ひ、この店があるばかりで開運町は賑やかなものであ

った。この中△は後、色内川の附近に移り、その後稲穂町の今の大國屋の向い角、安田保険のところへ移轉した。中△の大番頭は佐藤寿吉、新富町の④竹内も店員であった。角の棒田の土場町寄りの隣は、その石蔵の建った家でその隣が幡豆旅館、この幡豆旅館の主人勝太郎は川上貞奴の弟で、音次郎夫婦が小樽に興行に来るときまっこの旅館の二階で過したものである。

勝太郎はとても技能の勝れた指物屋で、自分の家の隣だったので、よくその細工場で細工をしているのが見られたものである。この土場町の坂は今までに三度切り下げしたが、昔は仲々の急坂で、荷馬車は登るに容易でなかったものだ。

（廣の質問 明治四十年頃野口雨情がこの開運町にいたとのことであるがその寄宿していた家が判らないだらうか）

それは記憶にない中△向井は信州の出で中△

には抱石先生と云う書家が滞在していた。それから中△の向いに④斎藤と云う大きな古着商兼質屋があり明治の始め三條公が小樽に来た時泊まった家であるが、この斎藤家は山形縣庄内の出身、この家にも書家とか画家とか、泊まっていた。それから今村三峯は重松医院の向い角に家を建てて住んでいたが、その家は今でもある筈。三峯の長男は私より二つほど年上だが、能書家で彫刻にも勝れ、今も尚花園町の田中金星堂にいる筈である。

（「何か、祖父桂次郎翁の作品がないか」との要望に対し、清治郎氏は湯呑み二ヶ、一輪挿一個、小皿一枚を取出し）この小皿は祖父が制作したもので、眞中に「明治十年内國勸業博覽會 東京」「量徳町本多桂次郎」と印刻してあるが、これはその博覽會に祖父は陶器を出品して受賞した記念に帰樽してから、小樽病院附近の赤土を

原料として小皿を焼き、親戚知友に記念として五枚宛て頒けたものの一枚が残っていたもので、これを貴殿に進ぜよう。それから他の三個は何れも私が作ったもので未だ本焼きをしていない素品で、これは使用することの出来ないものだが、唯私が作ったものとして進ぜます。大きい湯呑は支那の役の赤壁賦を書き、小さい方は大正の頃手宮古代文字が讀破されたとき永井町の一キ福田の主人に依頼され、小樽土産として焼いたらどうかとの奨めで作ったものである。尚祖父の業績については越崎宗一氏の「開拓前後」と云う書物の中に委しく書かれている。

土場町IIどばちょう、今の住吉町の一部
鐵力屋IIブリキ屋、薄い鉄板に錫(すず)を鍍金(めつき)したもの。オランダ語 **plik** おもちゃ、ちり取りなど家庭用品をつくった。

赤壁賦IIせきへきふ、宋の蘇軾の文、一〇八二年七月既望(二六日)、友人揚世昌と一夜赤壁に遊び、更にその冬郭遺・古耕道の二人と再遊した時の作。前者を「前赤壁賦」、後者を「後赤壁賦」という

十三 松川勘太郎翁の事

松川末松(七八) 談

昭和二十七年十一月十九日

錢函 松川家にて

私は明治八年青森縣河内字谷地町で生れた。
翌二年(九年の誤りか)母に伴われ渡道、所謂、弁財船に乗って来たが海が荒れて、古平へ寄港し、そこで上陸した。それから小樽まで陸路を経て来たが、当時、古平山道に山火事があり、辛ふじて火難を免れ小樽に着いた。小樽の海岸色内

と港町の境には浪が崖に打ち寄せ、浪待ちしなければ通れず、山ノ上町は一带の山立苺が繁茂していた、と母が後で語っていた。斯くして銭函へ来たのであるが、父は私達より一年前にこの銭函へ来ていた。と云ふのは父の弟、鶴松が何年か前にこの銭函へ来ていて、四鈴吉右エ門と云う人の養子になっていたからで、父は数年間その四鈴家に滞在していたのであった。私達が来てから父母は一家を成して定住することになった。それから父は銭函駅通所の小走役を三年ばかり勤めたが、恰も西南戦争の時とて当時札幌本府護衛のため各部落から二名宛の賦役を課し、一ヶ月交替で札幌へ出かけたものだ。所がある時、熊碓から唯一人より若者が出て来ないので、父は駅通所の役を承っている関係から他の一人の代わりにその若者と一緒に本府へ行き勤番の役を果たしたものであった。

父の奇行と云うのは死ぬまでちょん髷を廃めなかったことで、大正二年、七十二才でここで死亡し、眼を落としてから初めて髷を落としたものである。晩年、小樽水産組合の總代に選ばれ、そのチョン髷姿で小樽の組合の會議に出たことは一つの話題として賑わしたものであるが、これは父は若い時髪結い業であって、多くの人に髷を結ってやったものであるから、自分の髷も自分で結って断髪するのが惜しかったものであらう。それから写真を撮るのが大嫌いで、世間の人がチョン髷姿が珍しいからとて写真を撮らせてほしい、と父に頼んでも頑として應じなかった。ところがある年札幌の知り合いの家へ行ったら、その息子が何とかして撮ってやらうと障子の破れ穴から父の姿を撮ったのが唯一の記念となって現在残っているのである。

(そのチョン髷姿の写真には明治四十四年九月

十九日、松川勘太郎六十九才と書いてあった。）

山立母^{II}やまだち（山賊）・いちご、野苺か

十四 江差の繁次郎の身元調べ

中村純三 著

昭和二十四年一月二十日、函館新聞社發行、中村純三著 「江差の繁次郎」より

北海道のトンチの神様、江差の繁次郎とは一体どんな男であったか、系図が伝わっていないので詳しいことは分からないが、文化の生まれで明治の初年に六十才前後で死去したと云うのが本当らしい。厚沢部は俄虫の産で本名、福田繁次郎、通称若屋の繁次郎で通っていた。泊村の城の口部落に長く住んでいたことだけは事実

で、生家は能登衆でキンツバ屋兼一パイ屋だったといわれている。現に末孫といわれる福田政次郎なる人物が函館に居住しており、更に分家の繁次郎系統と自称する若狭屋益太郎と云う人も北見市に健在で、俄虫でも若狭屋某が分家の末裔と称して近隣から敬意？を表されているのだ。

繁次郎は五尺たらずの小男で、頭と目玉が馬鹿に大きく四十過ぎまで獨り身で通し、母親と二人暮らしだったが、酒よくボタ餅結構の肉食漢だったといわれる。長男でありながら稼業の方にはテンで身が入らず、三十代でスツカラカ^ンになった挙句、漁場稼ぎ、寺男、さてはきこりという具合に何回となく職を変へたが、何處へ行っても仕事よりは口が達者の持て余し者、だが若い者の間では大もてで繁ヘンド（船頭）になら是非使って貰いたいと云う者がワンサイ

たというから生れつき人心収攬術のようなものを心得ていたらしい。それというのも結局は彼の行くところ頼智頼才と笑いの連続だったからで、漁場親方の中には繁次郎を大漁のマスコットとして二人分の給金を奮發した人もあったというから面白い。いま、あの世にいる繁次郎に「アタも本道開發功勞者の一人ですよ」と言ったら彼は恐らく大きな目玉をクリクリさせて「馬鹿コケンナダ（お前達）またオラばボンボラカス（おだてる）のだべよ」と頭をかくに違いない。

（昭和二十四年一月二十日 函館新聞社發行、中村純三 著 「江差の繁次郎」より）

繁次郎には長男重人（ジュニン）本名東五右エ門 明治七年八月四十六才で泊村城の口で歿したが親には割合似ずどっちかと云えば無口

で生真面目な働き者だったといわれる。戒名大
安良雄居士 この東五右エ門には男、女の二子あり、男子を由太郎といって泊村城の口に住んだ。その養子の政治郎が函館市堀川町に現存している。次男繁吉、顔も氣持ちも父親そっくりで小さい時から大のイタズラ者、とても疊の上で往生は出来まいといわれたほどだが、後年積丹半島のニシン場を經營したり、北見へ乗り込んで新魚田を開發して成功を収めたと伝えられる。一説には上ノ國の若狭某へムコ養子に入つた後、各地を轉々として漁場を営んだとも言はれるが、日清戦争と前後して物故したらしいが子供がなかったので晩年の消息は不明である。兎に角頼智にかけては親の名を恥かしめない男
二代目繁次郎であった。

十五 文治澤の由来

加藤吉松（六十）談

昭和二十八年五月三十一日

於 豊倉校運動会

文治澤と云う名の由来は、明治二十年頃佐渡の人で前田岩次郎と云う男がこの土地へ来て定住することになった。そして土地を開墾して農業を始めたのがこの土地の開祖で場所は文治川の畔であった。その岩次郎の息子に文治と云う子があった。別にこれと云う変わった子でもなく特に優れた子でもなく極く平凡な子であったが、両親は目の中へ入れても痛くないほどの可愛がりであったので、世間の人も自然その子に愛相するようになった。その内入地者が一軒、二軒と殖えるようになった。然しまだ土地の名

がない。入地者は小樽の町が追々發展するので町へ出て自分達のいる土地の名を説明する譯に行かず、已むなく文治のいる澤だと説明した。

あ、あの子のいる澤なら知っている、とか、文治の澤なら分かる、とか云う風になつてはなしにこの沢を文治の澤と云う風になつて了つた。

この川の名を今でも文治川と呼び、自分は明治二十七年生まれだが自分としてはその岩次郎と云う人も文治と云う子も知らない。岩次郎は現在の前田太三郎の祖父に当る人である。

六月三日 前田太三郎（五八） 談

自分の祖父の父、即ち曾祖父が明治五年にこの地に入ったもので自分で四代目である。自分の熊獲りは二十八才の時が初めて、今までに大きいのを二十八頭、小熊を二頭獲つた。自分の息子は今年初めて一頭獲つた。

前田太三郎追談

曾祖父の名は六兵エと云ひ、曾祖父も祖父も文治澤で死んだ。父は谷口と云う姓であるがこれは母の後夫となったもので、自分は六才の時曾祖父に連られて佐渡から来たものである。文治と云うのは岩次郎の子ではない。母コクの妹ツルの夫に内田新太郎と云う者がおり今の文治橋のところに播摩與三七の水田があるが、そこに杏の木が一本ありその附近に新太郎が住み、文治を生んだのは明治二十五、六年の頃、その文治が住んでいる沢だから文治澤と誰言うとなく命名されて了ったものであるが、文治は今でも稲穂町（西三ノ一八）に現存し、自分が薪炭商をしているものだから文治に賣らしている。母コクは昨年八十一で死亡し、文治の母ツルは現在私の家に来ている。自分より二つほど年長である。あの杏はその内田新太郎が植えたもの

である。

十六 昔話あれこれ

小倉竹松（七一） 談

席に滝の弥生吉（七三）あり 共に福井縣人

昭和二十八年六月十二日

於 開運町五丁目 角の宅

私は福井縣吉田郡河合村鷲塚の生まれ、四才の時小樽に来て最初若松町に住み十余年経ってこの開運町に移ったがここへ来てから六十年近くになる。当時は一面の草原であった。花園町稲穂町一帯も勿論草ぼうぼうであった。學校は信香の筆谷の隣の開蒙學校に入學した。自分の家の隣り（小樽病院附）の長屋はその開蒙學校の建物の名残りで自分が二十才の時に買って移

し教室を仕切って長屋にしたのである。

星川座は今年解体した共同倉庫の側にあったもので倉庫の差降ろしのようなものであった。それから間もなく堺町に小樽座と云うのを星川が建てたが、これも債務の關係で何年も経営しなかった。星川龍蔵は当時小樽での親分であった。息子の虎雄も仲々の気性で小樽座を建て、債務に追はれたのを解決せんがためと云うが、虎雄がまだ兵隊に行かぬ前のこと、日本刀を提げて毎晩市中で辻斬りをやったものだ。これは当時市内を震わしたもので夕方になると人一人通らぬようになった。開運町の重松医院の前でも尼さんが斬られた。その辻斬りも殺されたものは一人もなく何れも重軽傷であった。当時、青山久太郎と云う名探偵がいて活躍したものだ。その辻斬事件は明治三十六、七年頃である。虎雄は現在尚眞栄町に住んでいるが今はも

うすっかり老衰して昔の倅はない。何しろ兵隊は三年で満期となるのに八年も在隊した男だから凡その人物の状態がわかることと思う。

開蒙小學校―私立開蒙小學校は明治二十年七月、村上三郎によって信香二十番地に開設された。明治二十七年三月末日に閉校（小樽市史第二卷四一四頁）

十七 熊確神社奉納の古刀

中澤慶次郎（七四）談

昭和二十八年六月十二日

船浜町日登吉五郎宅にて

熊確神社に奉納してある古刀は明治四十年の秋私が馬鈴薯の保存穴を掘らんと自分の家の前（佐藤政治家の裏手）のところを二尺ばかり掘

ったところ出て来たもので、この古刀の外に何か出ないかと探したらうるし塗の模様付きの木皮の様なものが出たが、その外のものは何も出なかった。これを私蔵すべきでないと思ってその翌年の春、お神酒上げ前に神社へ奉納したもので、あの古刀については別に他の人に見せたり鑑定して貰ったことはない。

十八 中△向井商店のこと

竹内房吉（七六）談

昭和二十八年七月二十四日

新富町中△竹内家にて

私は明治十一年福井縣丹生郡宮崎村井波で生まれ、十八才の時、明治二十八年に小樽に来てすぐ開運町中△向井商店に奉公した。主人嘉兵

エは信州の人で本家は札幌で喜六太と稱し明治七年に札幌で開業したもので、嘉兵エが開運町に店を出したのは明治十一年で土場町の本多桂次郎の招きによったもの、前には旅籠屋であったさうだ。何しろ開運町の公と云えば間口十六間半もあり、呉服太物、小間物洋物とあらゆるものを取扱い△と家印にした時代もあった。店員が六十名もいたので一番番頭は奥谷仁吉、次は林源也、この二人は私と同じ井波出身であった。

明治三十七年に公と云うのを札幌と同じく中△に改めた。その年色内川向こうに店を出して支店としたがそこは何年もたたぬ内に閉店し、明治四十一年に稲穂町第一火防線角に店を出した。然し何と云っても開運町時代が一番繁昌し^④今井なぞよりも賣上がずっと多かった。開運町の店の浜隣は柳湯という湯屋、その隣は重松医院、柳湯の裏手に向井病院があり、それに店員が病

気すると収容し重松さんが専門であった。中△の向いに斉藤喜一郎の家があり、その斉藤は向井より古く、開運町の命名者とのことだった。向井の山隣は橋本葉屋、その隣は土場町の角で棒田と云った。

私は三十才の時向井を出て独立した。最初新地町の現在の交番のある附近で呉服商を出し三年ほどいて、それからこの新富町へ移った。

この新富町の家は又木村源三郎の所有していた家であった。朝里の小林さんはよく知っている。酒の好きな人で眞栄橋の袂に越後屋という居酒屋がありよくそこへ飲みに行ったものであった。

私には子供が九人おり未だ末の二人が片づかないでいる。娘の一人を高島小學校の小泉訓導に嫁にやったが小泉は病死したので、その後を見てやらねばならず色々苦勞がある。妻は昨年七月十日に六十五才で死亡した。妻が二十

才私が三十才で結婚し苦勞を共にして来たが、金婚式に達しないで死別した。

十九 星川家及び星川座のこと

星川虎雄（七〇） 談

昭和二十八年七月二十四日

眞栄町星川宅前にて

私は十年前北見の留辺蕊と云うところで鉾山の鉾夫に支那人が六百名ほど入るので、その飯場の建築に人夫を連れて行き、私は鳶職頭であったので工事を指図している中に、脳溢血で倒れ、病院に収容されたが、幸い軽かったと見え二ヶ月位で帰ってくる事が出来た。然し、それ以来どうも身体の具合がうまくなく、且つ記憶力が減じて物忘れしてならず、昔のことなぞ

一向に思い出せない状態である。従って親父龍蔵のことはこれと云って記憶に残っていない。星川座の写眞は恐らく今日持っている人はいないと思う。若し潮見台の加賀谷福次郎方であれば或いはあるかも知れない。

私も今は落ちぶれてこんな長屋住まいをし日傭となつていますが、その内、閑な時ゆっくりお話ししたいと思います。

(虎雄は遂に昭和二十九年四月三日死亡した。生存中もう一度會つて話を聞きたかった)

二十 星川虎雄のこと

加賀谷福次郎(六三) 談

昭和二十八年七月二十四日

潮見台町三一 加賀谷宅にて

私は明治二十四年小樽で生れ、父を駒吉と云い、私の四つの時に死亡、その後母が子供を養育して行けないので、当時星川の仔分であつた川村佐平と云う男を入夫したのでしたが、実父駒吉も星川の先代の仔分でした。

何しろ小樽の星川と云えば小樽で飛ぶ鳥も落とす勢いの俠客で仔分が七十人もおり、どれもこれも一癖も二癖もあり義理と人情のためなら水火もいとわぬと云う男伊達、中でも兄貴分と称された仔分中の幹部級は藤田權太郎、石原音吉、牧田幸次郎、島谷幸吉、大宮勝太郎、板谷萬次郎、川村佐平、山口槌蔵、野村某などで中でも大宮や野村は乱暴者で手も足もつけられない男でした。私も実父や養父が仁義家業だったので星川とは親分仔分の関係となつて居るのです。

星川座の写眞は恐らくないのでないでしょう。堺町の小樽座の写眞は私の家にもあつた

のですが、現在誰かに貸してあるので手元にありません。何しろ龍徳町の火事の時、(私の家も星川座の向だったので)焼けたので、その時、焼いて了ったと思います。その火事は私の九つ

位と思いますが、その時星川座の一割だけ焼け残ったので、樽中の開校した当時で本なぞ取り出した記憶があります。樽中が明治三十五年、星川座で開校したとすれば私の十二才の年となるので或いは私の記憶誤りかもしれません。星川座の写真も、第一部消防番屋の写真も住初町の三浦写真屋がとったものです。消防番屋の写真は私が小樽消防署へ寄附してしまいました。

星川虎雄の父の龍蔵さんは花園町の松竹の前の裏通りのあたりの家で脳溢血で死亡しましたが虎雄の脳溢血も父譲りの病氣だと思います。何しろ虎雄は有名な酒豪で酒の失敗は数限りもなく、兵隊に十年も現役にいたなぞ押して知るべきで

す。有名な小樽での辻斬り事件は虎雄の二十才の年(明治三十六年?)かと思いますが、裁判が長引いて判決も虎雄が入営すると云うので大分減刑となった筈です。

現在の虎雄はまことに柔順で虎が猫になったようなものです。それでも萬一虎雄が死んだとなると各地に散らばっている元の仔分連中が相当集まることかと思えます。

(後記 虎雄死亡の時、何彼と世話したのは福次郎夫婦のみで仔分なぞ誰も来なかった。人情紙より薄い世の中であると福次郎の述懐、虎雄の後には息子照一(二六)貯金支局勤務がいる)

二十一 查地 山田吉兵エ土地のこと

松永安太郎（七三） 談

昭和二十八年十一月二十五日

朝里村が戸長時代のこと、河原戸長が元開拓使の御用測量をして後、道庁地理課で測量をやっていた中上梅太郎と云う男を朝里に連れて来て家を建ててやり朝里の土地の地割り、道路測定等やらせた。その家と云うのは当時としては立派なもので四平葺の桎屋根、周囲にガラス窓を配したもので、位置は私の家の上手に元大きな桜桃の木が二、三本あったところの川附きのところであった。この中上梅太郎が現在の大三地が平坦であり農耕に適していると見定めて小作人入地を勧奨した。最初は中上が河原戸長から貸下げを受けたらしく、当時の戸長は土地の處分権まで持っていたものである。

（中上の家は八畳一間位、カギ手に縁側あり一

寸見たところ立派な家であった。）

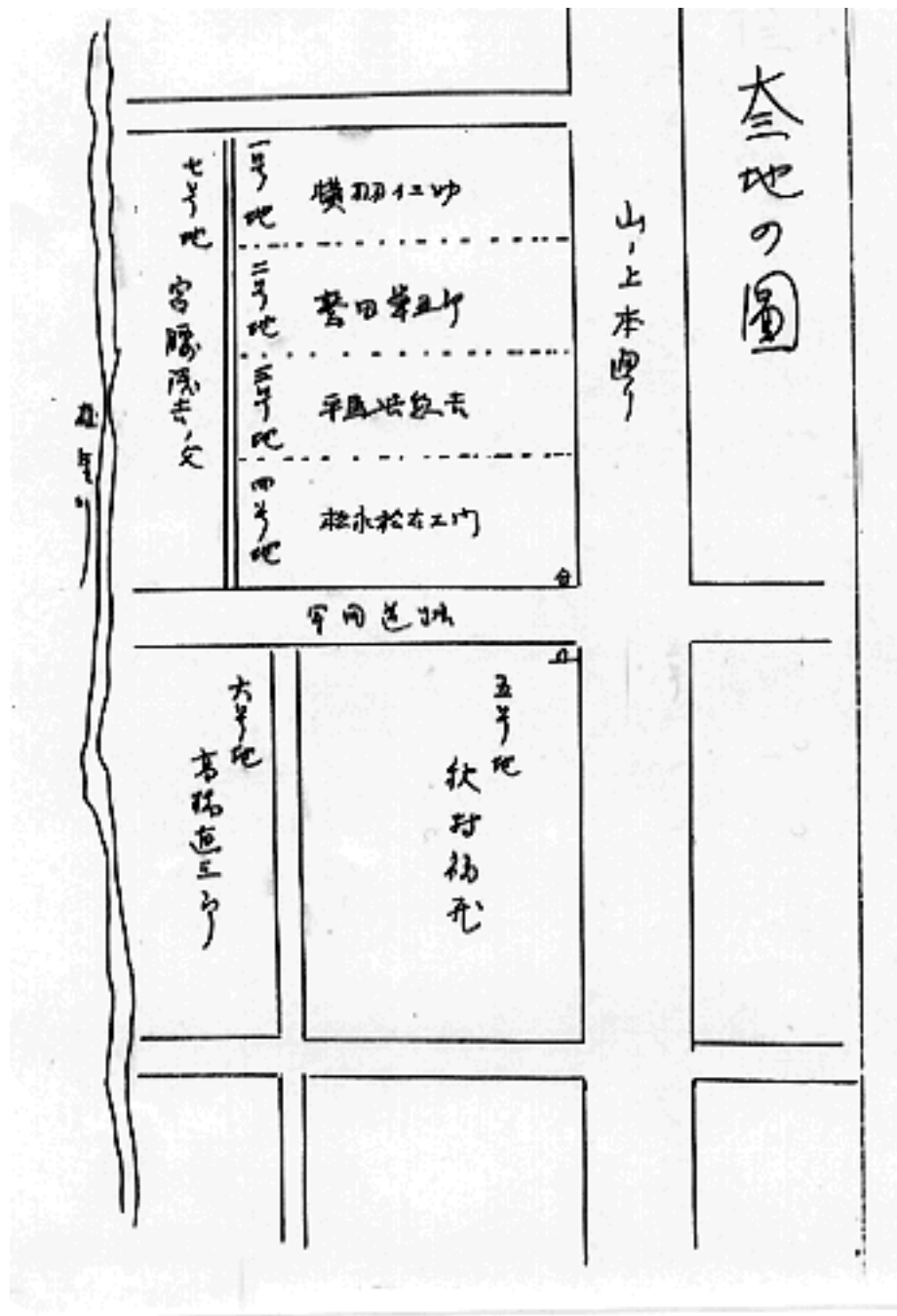
そこで中上はこの土地を一号から七号までに區劃し、大体一區劃は二町歩前後であった。そしてこの土地の周囲に下水溝を掘鑿させた。それから中上は小樽の富豪山田吉兵衛にこの土地を賣却したもので、それは明治二十年頃と思う。

そこで中上は測量師であるから道内各地を測量に歩くのであるが、札幌郡の篠路村の筑前開墾地にいた鷺田筆五郎に朝里の土地へ移って来ないかと奨め鷺田も心が動いて一家をまとめて移って来たのは明治二十一年であった。当時この土地に横羽仁助と云う者がいて鷺田と一棟二戸の隣同志に住み、横羽は一号地、鷺田は二号地、それから私は明治二十三年にこの地に入って四号地を借り、平馬與惣吉は三号地を借りた。そして私と平馬は一棟二戸の合借家となった。それから五号地は軍用道路から下手の小沢の土地

となつてゐるがあれは最初秋村福蔵が借りていたもの六号地は現在大平金作の作つてゐるところ、最後の七号地は私の家の前の道路から川沿いの鷺田水田にかけての一區劃でこれは宮腰浅吉の父が借りた。この宮腰は前記中上の家に住んでゐた。六号地は最初は高橋直三郎が借りたところである。その図を示せば次のとおりであ

るが、今から六十三、四年前のことであるから隔世の感がある。当時からの樹木と云ふのは現在一本も残つていない。

大三地 山田吉兵衛の家印が杓であつたため、この表現が採られた



二十二 色内町のこと

谷 内海芳八（八二） 談

昭和二十八年十二月四日

於 内海家 佐貫喜義と同行

私は明治五年一月十日福島縣若松市に生れた。

五才の頃一度小樽へ来たことがあるが、移住したのは十九才、明治二十三年十一月でした。當時この色内町にはまだ家がまばらで、この色内本通りあたりは海でありました。色内川は当時から曲がっていましたが、寺町通りと言って正法寺と直行寺がこの通りにありました。それから植田病院あたりには山があつて木はなかつたが、火山灰のような草山であつた。今の北海ホテルのあたりは一面の畑で、ホテルの向角あたりに秋野菜舗があつたが、仲買人の泉本初蔵

と云う男が、その辺一帶の土地を木村円吉に賣りつけて儲けたものである。私もこの色内で二千二百坪も土地を買いほんの僅かの差で賣つたこともある。潮見台小學校の上に京坂から五千坪の土地を坪一円五錢で買い、三円五十錢で賣つたこともあつた。然し、物價がそれ以上に高くなつて行く時代だから、土地でも家屋でも話にならぬ高くなる。石花菜一貫匁二十二、三錢の時代と今は千何百円と云う時代とでは比較にならない。向いの岩手屋（川越家、五十嵐の妻の兄）の家は半分にしたがこの半分は千七百円で井尻静蔵から買つたもの、土地もまた私のいる土地も續きで現在尚井尻の所有であるが、今では何十萬円でも賣買出来ない世の中となつた。思へば隔世と云うか、夢と云うか世の中の移り変わりには驚くより外はない。色内橋の附近に明治四十年頃運送屋がなかつたかとお尋ねで

あるが、そのような家のあったのを記憶しない。
私は小樽に住むようになって以来此處から動かないのでこの付近の事なら大てい知っている筈である。

（老妻銀行より金を受け取って来て内海老に渡す。板垣退助のついた百円札は今月一日から發行されたものであるが、この席で初めて見た）

石花菜ハクサイ せっかさい てんぐさのこと 海草、心太、寒天を作る材料

二十三 熊碓渚村の図と吹田家稲荷の事

吹田富蔵 (六六) 談

昭和二十九年三月十七日

私の祖父長四郎 (明治二十二年八月七日 七

十三才で死亡 即承院傳外祖燈居士) が江差からこの熊碓へ來住したのは私の父留吉が生れた元治元年です。母キンは十八才で父留吉と夫婦となり大正十二年三月三十一日五十七才で死亡し、父は明治四十年五月二日四十四才で若死にしました。父の兄を長太郎と云ひ長太郎の婿が後年村會議員をした寺ノ澤の止(とまる)です。止の妻は私と従妹関係ですが早く死亡しました。

長太郎伯父は明治二十七年七月二十二日死亡し戒名は慈照軒法山一燈居士と云います。寺は新富町の龍徳寺です。小林さんから聞いた熊碓神社に奉納されている明治八年の熊碓渚村の繪図は私の家に滞在していた画家の描いたものとは初耳でしたが、帰宅して色々調べてみました。どうも判然せず何日か経ちましてある日フト思いついたのは永らく私の家の神棚に安置してあった稲荷さんのことで、これについて母から聞

いていたことを思い出し、「あ、これだ！」と気がついたのです。それは母がある時「この稲荷はどこから来たのか一人の画描きがこの吹田家に来て何日か泊り、その泊り賃の代わりにこの稲荷さんを置いて行ったもので、後でまた取に来たがその時はあれはもうこの家にないと言ったら、そうかと言って帰って行ったそうだから」との事でその画家が私の家に滞在中、村井儀三郎家に行つてあの繪を描いたらしく、その画家と云うのは母がまだ吹田家に嫁に来ない前なので勿論會つたこともなく、唯、話に聞いただけなのです。

所でその稲荷さんの事ですが、私が兵隊から帰つて来てからのことですから大正二年の二十五才頃ですが、私は二年間ほど病気に罹つたことがあり、あまり長引くので花園町のある巫女（第二大通り花の湯附近のイ印と云う巫女）に

見て貰つたことがあるのです。するとその巫女の言うことには「お前の家には稲荷さんが祀つてあるがその稲荷さんの崇りで病気が治らないのだから稲荷さんを他へお祀りした方がよい」との御託宣なので、私はなるほど感激し、帰宅して二月の雪の中でしたが、岩井町から油揚二枚買つて来て、背中にその稲荷さんを背負い汗をかきながら寺ノ澤の金毘羅堂へ納めに行つたのです。その時、堂に錠が降されていたので村上栄五郎方から鍵を借りて来て誰に断つたものでなく金毘羅堂へ安置して来たものでしたが、現在その稲荷さんは寺ノ澤の吹田止家に奉安されていゝのです。

（右の話により私は富蔵氏を案内役として吹田止家に行き、稲荷像を拝み調べてみた）



稲荷は五穀をつかさどる倉稲魂（うかのみたま）を祀ったもの、御食津神（みけつかみ）を三狐神（みけつかみ）ともとも関係のないものを、むりにこじつけて、稲荷の神の使いとする俗信から狐の俗称ともなっている。ここでは狐の像ではないことを付記する

吹田 止 談

この稲荷さんは金毘羅堂に祀ってあったのですが、あれは大正時代でしたか部落の神社は一村一社の御布れが出たので村社を金毘羅さんと合祀することになったことがあります。ところ

が何年か経って漁師の村社は矢張り海岸に祀らねばならぬと再び現在の村社に奉遷したのでその時この稲荷さんも村社へ還したのでした。然し、これは吹田の稲荷と村の者が皆知っているもので、そんなら私の家へお迎へしようかと老母や妻と相談すると家族も賛成したので内田末作、阿部徳太郎の両氏の諒解を得て私はこの稲荷をお迎へしたのです。それは本家吹田家で奉納してから四、五年後かと思えます。そして最初私の家の横手に小さな御堂を建てそれに安置していたのですが、お祭りの時は長旗や吹き流しなど新調してお祭りをしましたけれど、ある時夜中に人の気配がするので出てみたら、こっそりお詣りに来ている者があり、又ある時は朝行つてみると赤飯や油揚げを上げてある時もありました。その内、寺ノ澤の區劃整理組合が出来て土方が大勢入り込んで来ましたので、若し稲荷さ

んにいたずらされては勿体ないと思ひその稲荷
さんを私の家に奉安し、そのお堂は畑の中で焼
いて了ったので、それ以来私の家の神棚に奉安
しているのです。

画家II中村宗誠（小林廣調べ）

二十四 岡本犬助一族のこと

岡本静江（五六） 談

昭和二十九年四月二十四日

於 若竹會館

私の祖父岡本犬助は廣島縣の士族で、明治の
中期朝里山の上に住んでいました。家は士族で
あったため刀劍類が澤山ありましたが、今では
古物に過ぎません。何と云っても祖父を語る唯

一の物は朝里山の上にあった頃澱粉製造工業を盛
んにやっていたことでしょう。枉里川を利用し
て朝里山の上の馬鈴薯を買い集めかなり大がか
りに澱粉を製造したものです。この祖父も日高
浦河へ移住し、浦河で八十四、五才で歿しまし
た。

私の父は祖父犬助の長男で權次郎と云ひ、炭
鑛鉄道に勤務する役人でした。父は私が三才の
時ですから明治三十四年札幌で死亡しました。
私には姉のハツエ、兄の保久と三人兄弟で、母
は稗田市太郎に再婚し稗田の子キヨ、キクの二
人を産みました。キヨは長らく小樽駅の出札係
をし今は炭山に居り、キクは警官と結婚して札
幌におります。母カノは十三、四年前に七十才
で札幌で死亡しました。父は四十二の厄年で死
んだのです。

浦河にはまだ叔母が一人九十才位で生きてい

ます。梶田クマと云って父權次郎の妹ですがクマの娘の愛子と云うのも生存しています。

その外、叔父に庄さんと云うのがいました。

庄助と云うのか庄蔵と云うのか記憶していませんが唯庄さんと聞いていました。モンペイと云うのがその庄さんのことだと思います。庄さんの弟は大助だと思えます。岡本盛貞と云ふ歌を作った人は知りません。明治三十一年に朝里在住と云ふと祖父大助のことではないでしょうか。それから稗田の家にいた竹田政次郎と齊藤由太郎とは従兄弟関係で由太郎と云うのは稗田の前妻の子です。私の姉のハツエは昨年六月、五十才で夕張で死亡しました。

（岡本盛貞の歌、明治三十一年新年勅題「新年雪」で椎本吟社々中、橘 道守編輯詠進歌集より）

野も山もうみも静けき年立ちて

光をそふる けさの白雪

二十五 厩町の昔話

厩町 小林廣三郎（八六）翁談

昭和二十九年十月二十日

私の郷里は新潟縣西蒲原郡で家は漁業の網元で若い者三十五名も使用して盛んに鱈の地曳き網をしていたのですが、私の二十五才の時、明治二十六年、妻を伴いこの小樽へ移ってきたのです。その時妻は十九才で、一女児がいました。小樽へ来てから矢張り地曳網を始めたのですが、その時は、主として鱈、鮭、鯖類の漁獲で場所はこの厩から手宮寄り、それから山中方面でやりました。

最初、色内町の色内川附近に家を持ちました
が山中へ移った事もありました。山中で一回、
色内で一回、二回も火災に會い家財全部焼いて
しました。色内の火事は有名な取引所の火事
で明治三十七年五月八日の事です。その時、網
修理をしていたのですぐ網類を色内川に投げ込
んだので網だけは助かりました。その取引所の
火事の後でこの厩へ移って来たのですがもう六
十年近くになります。

当時この厩には日本人の家は五六戸よりなく、
アイヌの家も三四軒ありました。私の家の前に、
今の床屋のあるあたりに、ハンク口、アイキ
と云う兄弟アイヌの家が二戸あり、ハンク口は
その兄の方でした。それから青木の裏に傳平の
ババと云うメノコの家がありました。それらの
アイヌはどこへ移って行ったのか行き先は判り
ません。

この厩と云う地名も馬の厩舎があったわけ
なく、アイヌ語から転化したものらしいです。
古代文字の洞穴はその頃からあって、よく乞食
が泊まり高島通いの女子供は怖ろしかったもの
です。よく物賣りが通ると乞食が出て来て何人
も集まって恐迫したものです。その附近から手
宮寄りの方は轉石だらけ岩だらけの浜でありま
した。

鱈、鮭、鯖、いわし、ちか、さば

厩ニ高嶋の厩岬附近の旧町名

山中ニ旧天望閣下の海岸からオタモイ境界のモイ崎の海岸

まで 小樽市史第一卷二九二頁

朝里叢書第貳卷

小樽郡の真実（正・続） 第一版第一刷

編者 小林 廣

翻刻 小樽・朝里まちづくりの会 朝里遺産部会

末永 通 瀧内淳子 守谷明宏

監修 朝里郷土史資料調査研究所

主宰 小林定典

発行日（第一版） 平成十六年九月一日

発行 NPO法人 小樽・朝里まちづくりの会

事務局 小樽市新光四丁目一番十六号

北海道新聞中販売所内

朝里遺産部会連絡先 sunaga@asari.cc